鴻臚館跡 8

— 平成7・8年度発掘調査概要報告 —

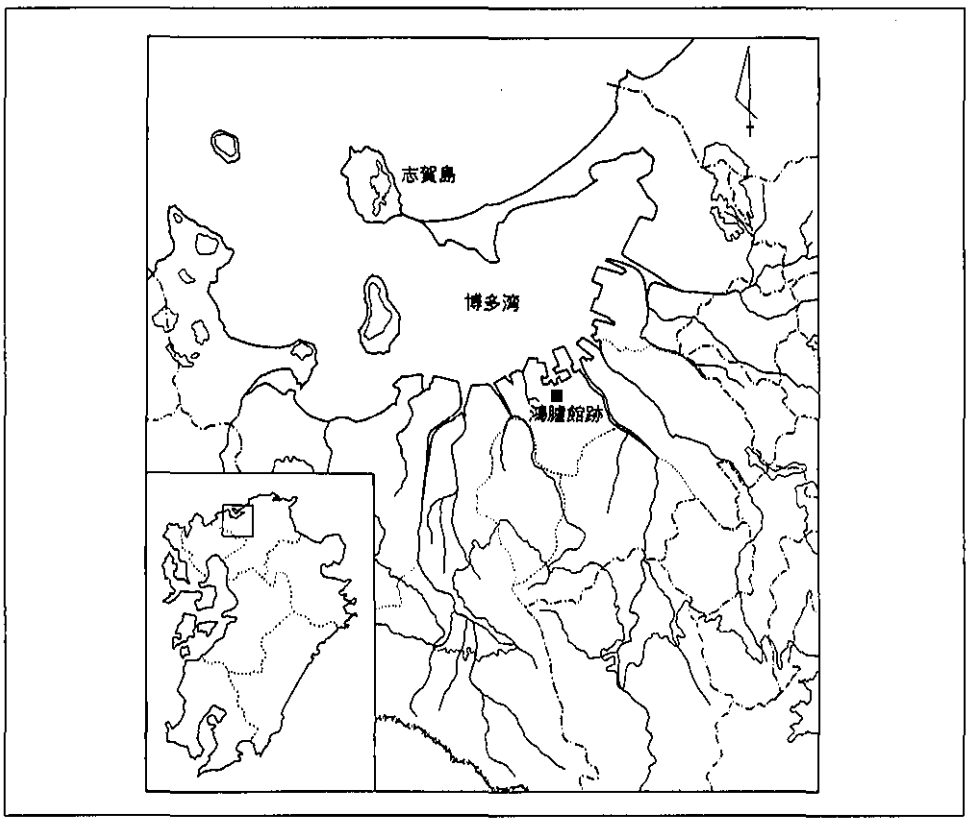
福岡市埋蔵文化財調査報告書第545集

1997

福岡市教育委員会

鴻 臚 館 跡 8

平成７・８年度発掘調査概要報告



平成９年

福岡市教育委員会



(1) 鴻臚館跡周辺景観（南から）



(2) 鴻臚館跡整備地全景および第 2 区遠景（北東から）



(1) 平成 7 ・ 8 年度調査
第 1 区全景（南から）



(2) 平成 7 ・ 8 年度調査
第 2 区全景（東から）

序

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、翌63年度から本格的に開始されました。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を目的として、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を現在推進しております。

本書は、平成７・８年度に実施した鴻臚館跡南域の遺構確認を目的とする発掘調査の概要報告書です。本報告書が埋蔵文化財への御理解と御認識の一助となれば幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の完成にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた大蔵省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育庁の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成９年３月15日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　　言

1．本書は、平成７・８年度に実施した鴻臚館跡発掘調査の概要報告書である。
2．本書で用いた地図は、Fig, 1 に国土地理院発行五万分の１地形図（NI-52-10-11/福岡11号）福岡を、Fig, 2 に福岡市都市計画図NO60・61・71・72を使用した。
3．本書で用いた方位は、平面直角座標系第Ⅱ座標系である。磁北方位は西偏６°40′である。
4．遺構は通し番号をつけた後、遺構性格を表記したアルファベットを番号の前に付した。
　柵列・塀；ＳＡ○○、井戸　；ＳＥ○○、道　　；ＳＦ○○、
　建物跡　；ＳＢ○○、堀・池；ＳＧ○○、　柱穴；ＳＰ○○、
　溝状遺構；ＳＤ○○、性格不明の土壙・竪穴；ＳＫ○○
　　またはＳＸ○○
5．本書の執筆・編集は田中喬夫が担当した。
6．編集に際しては、整理調査員　宮園登美枝（図面整理・浄書）、整理作業員寺村チカ子、山口玲子、堀一恵、金石邦子（遺物分類整理）の補助を受けた。

本 文 目 次

頁

第１章　序　説……1
１、調査計画……1
２、既往の調査……3
３、平成７年度調査事業概要……6
(1)発掘調査の組織……6
(2)調査事業の概要……6
４、平成８年度調査事業概要……7
(1)発掘調査の組織……7
(2)調査事業の概要……7
第２章　調査の記録……8
１、平成７年度第31次調査……8
(1)調査区の位置……8
(2)調査の目的……8
(3)第１区の調査……9
(4)第２区の調査……14
(5)小結……19
２、平成８年度第35次調査……20
(1)調査の目的……20
(2)第１区の調査……20
(3)第２区の調査……20
(4)小結……28
第３章　結　語……29

挿図目次

頁

Fig, 1 鴻臚館跡と周辺遺跡分布図(1/50,000) …… 2
Fig, 2 福岡城跡発掘調査位置図(1/6,250) …… 4
Fig, 3 平成7・8年度発掘調査区位置図(1/2,500) …… 8
Fig, 4 『福岡城絵図』中における第1・2区推定位置図 … 9
Fig, 5 第1区遺構分布全体図および土層断面図 (1/70) …10
Fig, 6 第1区出土遺物実測図 (1/3) ……12
Fig, 7 第2区配置図1 (1/600) ……14
Fig, 8 第2区配置図2 (1/500) ……折り込み
Fig, 9 第2区出土遺物実測図 (1/3) ……18
Fig,10 第2区遺構配置図 (1/80) ……折り込み
Fig,11 第2区土層断面図1 (1/80) ……21
Fig,12 第2区土層断面図2 (1/80) ……23
Fig,13 第2区出土遺物実測図1 (1/3) ……25
Fig,14 第2区出土遺物実測図2 (1/3) ……27
Fig,15 福岡城内之図中のSX895推定位置 ……31
Fig,16 球場周辺土層断面想定図 ……32

図版目次

巻頭図版1 (1)鴻臚館跡周辺景観 (南から)
(2)鴻臚館跡整備全景および第2区遠景 (北東から)
巻頭図版2 (1)平成7・8年度調査第1区全景 (南から)
(2)平成7・8年度調査第2区全景 (東から)
PL, 1 (1)第31・35次調査第1区全景 (南から)
(2)溝SD12・33検出状況 (西から)
(3)調査区北東部土壙および柱穴検出状況 (南から)
(4)第1区作業風景 (北西から・平成7年度)
PL, 2 (1)第31・35次調査第2区調査前現況 (東から)
(2)第31・35次調査第2区調査前現況 (西から)
(3)第31次調査第2区トレンチ掘り下げ状況 (北から)
PL, 3 (1)第31次調査第2区掘り下げ状況 (西から)
(2)第31次調査第2区掘り下げ状況 (東から)
PL, 4 (1)第31次調査第2区東トレンチ掘り下げ作業風景 (南から)
(2)第31次調査第2区東トレンチ掘り下げ状況 (東から)
(3)第31次調査第2区東トレンチ掘り下げ状況 (北から)
PL, 5 (1)第31次調査第2区東トレンチ布掘状遺構SX865検出状況 (南から)
(2)第31次調査第2区東トレンチ布掘状遺構SX865検出状況 (東から)

PL，6 (1)第31次調査第２区土塁南面トレンチ掘り下げ作業風景（南から）
(2)第31次調査第２区土塁南面トレンチ掘り下げ作業風景（東から）
(3)第31次調査第２区土塁南面トレンチ全景（南東から）
PL，7 (1)第31次調査第２区土塁南面トレンチ検出石列SX867・868検出状況（北から）
(2)第31次調査第２区土塁南面トレンチ検出石列SX867・868検出作業風景（北から）
(3)第31次調査第２区土塁南面トレンチ検出石列SX867・868検出状況（東から）
PL，8 (1)第35次調査第２区土塁盛土除去状況（北東から）
(2)第35次調査第２区土塁基底面（第６層上面）検出状況（北から）
PL，9 (1)第35次調査第２区土塁盛土除去作業風景（北東から）
(2)第35次調査第２区第８層掘り下げ作業風景（東から）
PL，10 (1)第35次調査第２区溝SD864、布掘状土壙SX865検出状況（北東から）
(2)第35次調査第２区中央部東西土層断面（北から）
(3)第35次調査第２区溝SD864検出状況（東から）
(4)第35次調査第２区溝SD869内の礫群SX870出土状況（東から）
(5)第35次調査第２区溝SD869内の礫群SX870出土状況（北から）
PL，11 (1)第35次調査溝SD864、布掘状遺構SX865検出状況（東から）
(2)布掘状遺構SX865検出状況（東から）
(3)布掘状遺構SX865検出状況（南東から）
PL，12　平成７年度調査出土遺物１
PL，13　平成７年度調査出土遺物２
PL，14　平成８年度調査出土遺物１
PL，15　平成８年度調査出土遺物２

表目次

Tab，1　鴻臚館跡調査中期計画表　1
Tab，2　福岡城跡調査一覧　5
Tab，3　平成７・８年度検出遺構編年表　30

第1章　序　説

1．調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の平和台野球場外野席における関連遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための本格的な発掘調査が開始された。発掘調査は「鴻臚館跡調査中期計画」の下で実施している。

中期計画は、鴻臚館跡推定地が国史跡福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定し、平成５年度第２回指導委員会で了承を受けた。Tab，1にその概要を示した。

第Ⅰ期調査は平和台野球場外周南側部分を対象に、昭和63年度～平成４年度にかけて調査を実施。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、平成５年度から７年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施した。

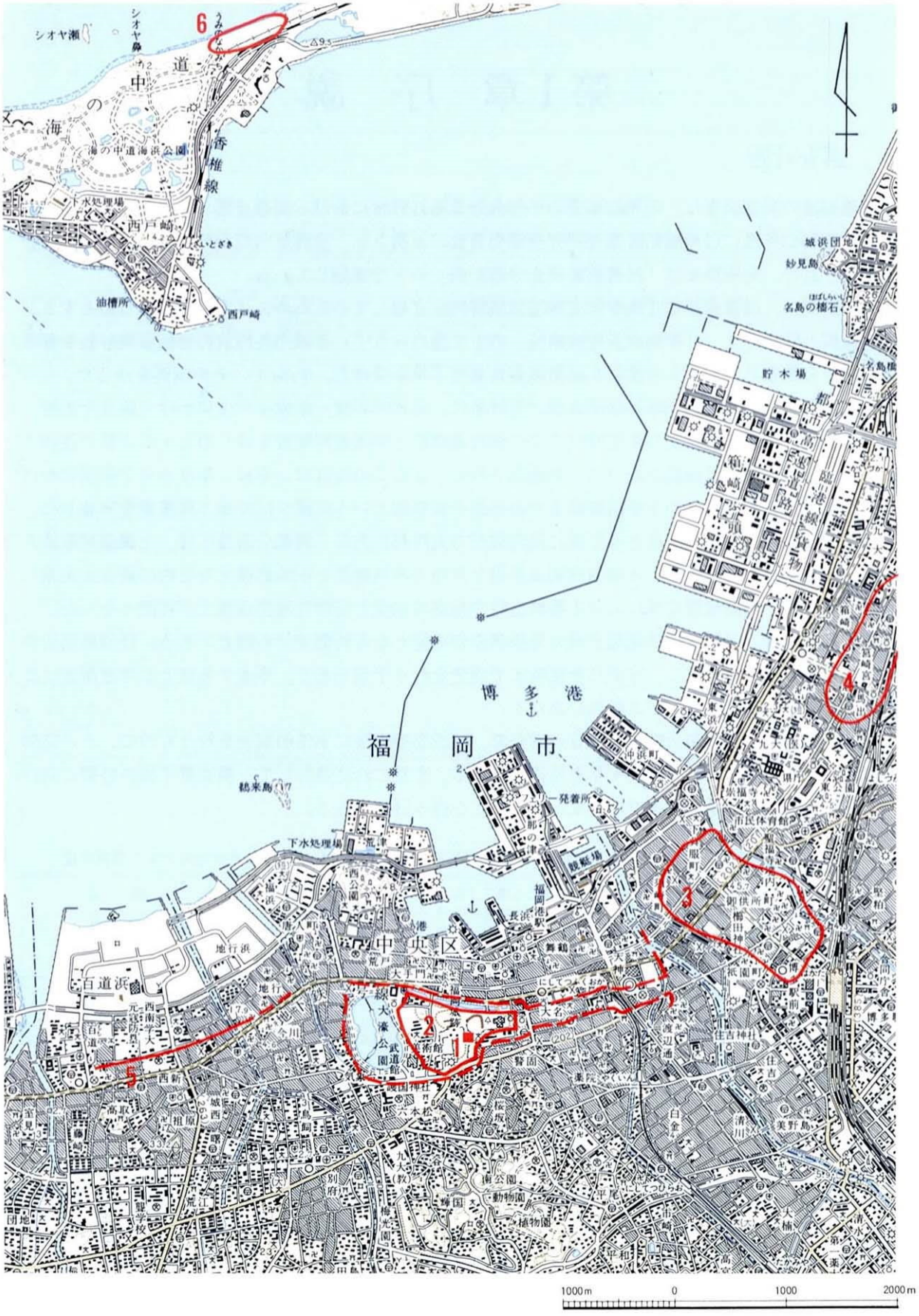
第Ⅱ期調査は、平成５年度と６年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館関連遺構と遺物の有無確認と旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西北域における築城当時の地業の状況と当時の海岸線復元が可能となった。

第Ⅲ期調査は、平和台野球場撤去後の発掘調査が可能となる時期までの調査である。野球場周辺の調査可能な５地区を選定し、平成15年度頃まで調査を行う予定である。平成７年度と８年度調査はこの第Ⅲ期調査の初年度および２年次にあたる。

第Ⅳ・Ⅴ期調査は平和台野球場部分の調査で、野球場撤去後に本格的調査を行うもので、その期間は撤去工事立会調査も含めて10ヶ年を見込んでいる。またこれに並行して、調査終了後の整備に向けて、基本構想から実施設計までの立案・整備施工を行う計画である。

Tab.1　鴻臚館跡調査中期計画表（平成９年３月15日現在）※網かけ部分は本報告書の対象とする事業年度

		対象地区	昭62～平4	5年	6年	7年	8年	～15年	～20年	～25年	備　考
発掘調査	緊急調査	平和台球場	―								鴻臚館跡の発見
	第Ⅰ期調査	旧テニスコート	―	―							指導委員会の設置 本格的調査の開始 第Ⅰ期整備対象地
	第Ⅱ期調査	西広場		―	―						範囲確認調査 旧地形の復元
	第Ⅲ期調査	球技場周辺				▒	▒				範囲確認調査 平成７年度から野球場の調査が可能となる時期迄
	第Ⅳ期調査	野球場南区									球場撤去後に調査着手（５カ年計画）
	第Ⅴ期調査	野球場北区									球場撤去後に調査着手（５カ年計画）
整備	第Ⅰ期整備	旧テニスコート			―	▒					平成７年８月10日完成
	第Ⅱ期整備	球場跡地									平成23年頃に完了予定（10カ年計画）



Fig, 1　鴻臚館跡と周辺遺跡分布図(1/50,000)

1．鴻臚館跡
2．福岡城跡（国指定史跡）
3．博多遺跡群
4．箱崎遺跡群
5．元寇防塁跡（国指定史跡）
6．海の中道遺跡

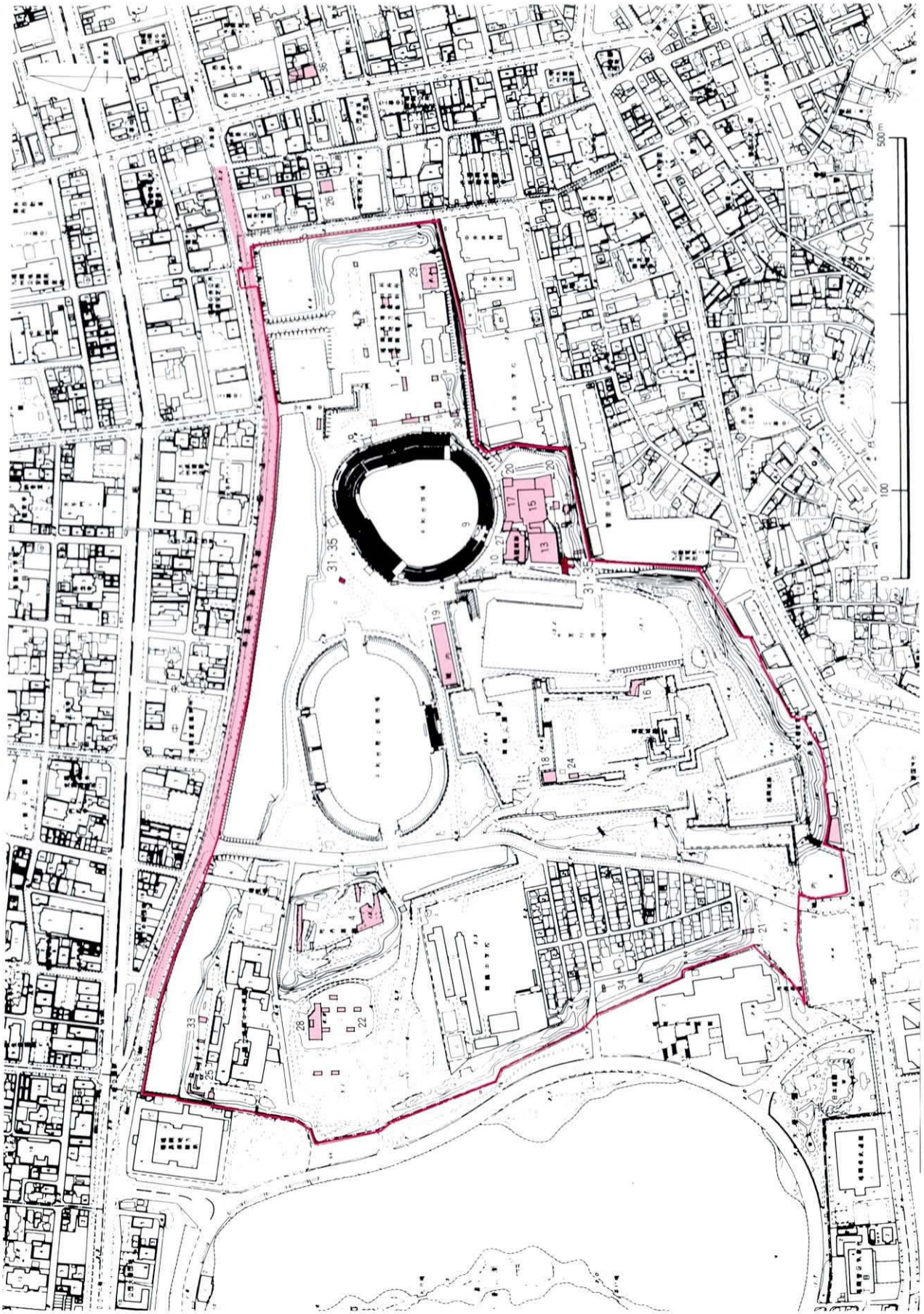
2．既往の調査

福岡城跡の調査は、史跡指定範囲の内外において、平成８年度末までに37地点について調査が実施されている。そのうち鴻臚館跡発掘調査事業として実施されたのは13次18地点である。Tab，2にその内訳を示した。なお文献番号は参考文献一覧（５頁）に対応する。

Tab，2 福岡城跡調査一覧（平成８年度現在）

調査番号	次数	地　区	史跡内外区分	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者	文　献	備　考
——	A	三の丸中央部	史跡内	テニスコート建設		510800～３日間	九州文化総合研究所	1·7·11	鴻臚館１次
——	B		史跡内	国立病院建設		590626～590702	文部省文化財保護委員会	1	
6301	1	三の丸東郭	史跡内	裁判所建設	596	631007～631105 640327～640331	福岡県教育委員会	2	鴻臚館２次
7605	2	内堀外壁	史跡外	地下鉄建設	14,900	761201～771008	折尾学，池崎譲二 浜石哲也，山崎龍雄	4	
7728	3	薬院新川	史跡外	地下鉄建設	500	780301～780630	折尾学，池崎譲二	4	
7948	4	御鷹屋敷跡	史跡内	史跡整備	2,200	790719～790811	飛高憲雄，力武卓治	3 ・ 8	
8134	5	赤坂門北側内堀	史跡外	ビル建設	70	820317～820326	田中壽夫	4	
8343	6	祈念櫓跡	史跡内	史跡整備	36	840201～840220	井沢洋一		
8449	7	肥前堀東端部	史跡外	県公園建設	580	840601～840612	福岡県教育委員会		
8533	8	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	150	850700～850800	折尾学，山崎純男	9	
8747	9	三の丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男，吉武学	11 ・ 14	鴻臚館３次
8829	10	三の丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727～881210	山崎純男，吉武学	11 ・ 22	鴻臚館４次
8865	11	西～南縁土塁内壁	史跡内	公園整備	500	880727～881210	山崎純男，吉武学	10	
8840	12	肥前堀東部	史跡外	ビル建設	650	881107～881126	柳沢一男	12	
8910	13	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,200	890420～891207	山崎純男，吉武学	11 ・ 22	鴻臚館５次
8950	14	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	700	891011～891021	菅波正人	13	
9005	15	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,300	900409～910131	山崎純男，吉武学	11 ・ 22	鴻臚館６次
9065	16	月見櫓跡	史跡内	確認調査	190	910301～910331	山崎純男，吉武学	15	
9130	17	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,000	910501～920331	山崎純男，瀧本正志	16 ・ 22	鴻臚館７次
9146	18	時櫓跡	史跡内	確認調査	250	920301～920331	瀧本正志		
9218	19	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,680	920615～921030	山崎純男，瀧本正志	17	鴻臚館８次
9236	20	三の丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910～930331	山崎純男，瀧本正志	17 ・ 22	鴻臚館９次
9262	21	花見櫓跡	史跡内	確認調査	200	930301～930331	瀧本正志		
9326	22	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	450	930816～940228	田中壽夫，瀧本正志	19	鴻臚館10次
9345	23	追廻門南側堀	史跡外	公園整備	220.3	931213～940228	井沢洋一	18	
9353	24	本丸西縁部	史跡内	公園整備	80	931215～931218	田中壽夫，瀧本正志		
9363	25	潮見櫓跡石垣	史跡内	史跡整備	150	940301～940328	田中壽夫，瀧本正志		
9416	26	赤坂門石垣	史跡外	変電所建設	255	940525～940806	吉武学	20	
9420	27	三の丸中央部	史跡内	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫，瀧本正志	21	鴻臚館11次
9432	28	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	850	940801～950320	田中壽夫，瀧本正志	21	鴻臚館11次
9451	29	三の丸東部郭	史跡内	施設建替	1024	941101～950130	力武卓治	25	
9463	30	三の丸南側土塁	史跡内	確認調査	60	950201～950309	田中壽夫，瀧本正志	21	鴻臚館11次
9537	31	三の丸中央部	史跡内	確認調査	380	951101～960329	田中壽夫	24	鴻臚館12次
9546	32	中堀	史跡外	共同住宅建設	154	951211～951227	瀧本正志	23	
9561	33	三の丸西北郭土塁	史跡内	公園整備	500	960301～960329	力武卓治		
9617	34	三の丸西南郭土塁	史跡内	駐車場整備	32	960621～960702	田中壽夫		
9620	35	三の丸中央郭	史跡内	確認調査	450	960704～961204	田中壽夫	24	鴻臚館13次
9630	*36*	肥前堀	史跡外	共同住宅建設	*46*	*960823～960823*	池田佑次		
9639	37	赤坂門外壁	史跡外	事務所建設	10	960912～960912	池田佑次		
9671	38	潮見櫓跡基壇	史跡内	史跡整備	300	970220～970318	田中壽夫		

凡例 太字箇所は本報告掲載分
史跡整備：教育委員会所管事業に伴う調査
公園整備：都市整備局所管事業に伴う調査
確認調査：福岡城跡・鴻臚館跡の調査
工事名のある調査：開発に伴う緊急調査



Fig，2　福岡城跡発掘調査位置図(1/6,250)

【調査報告書・文献一覧】

1　高野孤鹿『平和台の考古史料』　1972
2　福岡県教育委員会「史跡福岡城発掘調査概報」　福岡県文化財調査報告書第34集　1964
3　福岡市教育委員会「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷」　福岡市埋文調報第59集　1980
4　福岡市教育委員会「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」　福岡市埋文調報第101集　1983
5　池崎譲二・森本朝子『福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション』　福岡市埋文調報第101集所収　1983
6　弓場知紀『出光美術館の高野コレクション』　福岡市埋文調報第101集所収　1983
7　九州大学考古学研究室『九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物』　福岡市埋文調報第101集所収　1983
8　福岡市教育委員会「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷図録編」　福岡市埋文調報第59集　1990
9　福岡市教育委員会「福岡城肥前堀」　福岡市埋文調報第131集　1986
10　福岡市教育委員会「福岡城跡・Ⅳ―内堀内壁の調査―」　福岡市埋文調報第237集　1991
11　福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報」　福岡市埋文調報第270集　1991
12　福岡市教育委員会「福岡城肥前堀第３次調査報告」　福岡市埋文調報第293集　1992
13　福岡市教育委員会「福岡城肥前堀第４次調査報告」　福岡市埋文調報第294集　1992
14　福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅱ」　福岡市埋文調報第315集　1992
15　福岡市教育委員会「福岡城　月見櫓」　福岡市埋文調報第316集　1992
16　福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅲ」　福岡市埋文調報第355集　1993
17　福岡市教育委員会「鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概要報告」　福岡市埋文調報第372集　1994
18　福岡市教育委員会「福岡城跡第23次調査報告」　福岡市埋文調報第415集　1995
19　福岡市教育委員会「鴻臚館跡５　平成５年度発掘調査概報」　福岡市埋文調報第416集　1995
20　福岡市教育委員会「福岡城赤坂門跡－福岡城跡第26次調査報告－」　福岡市埋文調報第463集　1996
21　福岡市教育委員会「鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告」　福岡市埋文調報第486集　1996
22　福岡市教育委員会「鴻臚館跡７　－鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告－」　福岡市埋文調報第487集　1996
23　福岡市教育委員会「福岡城跡－福岡城中堀跡の調査－」　福岡市埋文調報第498集　1997
24　福岡市教育委員会「鴻臚館跡８　－平成７・８年度発掘調査概要報告－」　福岡市埋文調報第545集　1997
25　福岡市教育委員会「史跡福岡城跡－東の丸の調査－」　福岡市埋文調報第546集　1997

（福岡市埋文調報は、福岡市埋蔵文化財調査報告書の略）

3．平成7年度調査事業概要

(1)発掘調査の組織

1)調査および整備指導

鴻臚館跡調査研究指導委員会（第4期2年次）

委員長	東京女子大学名誉教授	平野邦雄	国史学			
副委員長	九州大学名誉教授	横山浩一	考古学			
委員	財団法人大阪府文化財調査研究センター理事長	坪井清足	考古学			
	前奈良国立文化財研究所長	鈴木嘉吉	建築史学	福岡大学教授	小田富士雄	考古学
	奈良国立文化財研究所長	田中　琢	考古学	九州大学教授	西谷　正	考古学
	福岡県文化財審議会委員	渡辺正気	考古学	岡山大学教授	狩野　久	国史学
	九州歴史資料館副館長	石松好雄	考古学	福岡大学教授	川添昭二	国史学
	九州芸術工科大学教授	杉本正美	造園学	学習院大学教授	笹山晴生	国史学
	瑞穂短期大学教授	澤村　仁	建築史学	山口大学教授	八木　充	国史学
	京都大学名誉教授	中村　一	造園学	東京大学助教授	佐藤　信	国史学
	工学院大学教授	渡辺定夫	都市工学			

2)発掘調査・整備事業主体

調査・整備主体	福岡市教育委員会教育長	尾花　剛
	文化財部長	後藤　直
調査総括	文化財整備課長	柳田純孝
	文化財部課長（史跡整備等担当）	塩屋勝利
庶務担当	管理係長	後藤晴一
	管理係	林　国広
調査・整備担当		田中壽夫
	整理調査員	宮園登美枝
調査作業	家村冨基郎、磯村博男、梅崎　元、大橋善平、大村芳雄、嘉藤栄志、斎藤善弘、島津明男、高田甚一郎、堤　篤史、中尾　亨、仲野正徳、	
整理作業	寺村チカ子、堀　一恵、金石邦子、真鍋晶子、山口玲子	

(2)調査事業の概要

鴻臚館跡調査研究指導委員会

第1回平成7年8月9・10日鴻臚館跡第Ⅰ期整備総括と今後の調査について検討した。

第2回平成8年3月28日平成7年度の調査成果と、8年度調査計画について検討した。

鴻臚館跡発掘調査　鴻臚館跡第Ⅲ期調査計画初年度事業として2地点について実施。平和台野球場北西部の鴻臚館関係遺構の有無確認（第1区）と、鴻臚館跡南域の範囲確認（第2区）を目的に実施。

ボーリング地質調査　平和台野球場東側および西側周辺における福岡城築城以前の旧地形復元を目的に、6地点を選定し実施。築城当時以前は野球場中央から以北には砂州が展開していたことが判明した。鴻臚館造営時期（奈良時代初頭）の状況については考古学的発掘を要すると判断された。

鴻臚館跡第Ⅰ期整備　平成5年度から始まった整備事業は本年度をもって終了した。本年度は、6年度完成の鴻臚館跡展示館内に、平安時代の礎石建物復元模型を製作した。平成7年8月10日に展示館開館記念式典を行い一般公開を開始した。なお、「鴻臚館7」（5頁文献24）に整備内容を報告している。

公開事業　鴻臚館展示館開館を記念し、平成7年7月4日～30日に、福岡市博物館にて特別展「鴻臚館の精華」を実施した。入場者数は14,143人。11月11日に現地説明会を実施（参加者237人）。

4．平成８年度調査事業概要

(1)発掘調査の組織

1)調査および整備指導

鴻臚館跡調査研究指導委員会（第５期１年次）

委員長	九州大学名誉教授	横山浩一	考古学			
副委員長	学習院大学教授	笹山晴生	国史学			
委員	財団法人大阪府文化財調査研究センター理事長	坪井清足	考古学			
	奈良国立文化財研究所長	田中　琢	考古学			
	福岡大学教授	小田富士雄	考古学	九州大学教授	西谷　正	考古学
	山口大学名誉教授	八木　充	国史学	福岡大学教授	川添昭二	国史学
	岡山大学教授	狩野　久	国史学	東京大学教授	佐藤　信	国史学
	前奈良国立文化財研究所長	鈴木嘉吉	建築史学	瑞穂短期大学教授	澤村　仁	建築史学
	九州芸術工科大学教授	杉本正美	造園学	工学院大学教授	渡辺定夫	都市工学
	京都大学名誉教授	中村　一	造園学			

2)発掘調査・整備事業主体

調査・整備主体	福岡市教育委員会教育長	町田英俊
	文化財部長	後藤　直
調査総括	文化財整備課長	柳田純孝
	文化財部課長（史跡整備等担当）	塩屋勝利
庶務担当	管理係長	陶山能成
	管理係	林　国広
調査担当		田中壽夫
	整理調査員	宮園登美枝
調査作業	家村冨基郎、礒村博男、梅崎　元、大橋善平、大村芳雄、嘉藤栄志、斎藤善弘、島津明男、高田甚一郎、堤　篤史、中尾　亨、仲野正徳、	
整理作業	寺村チカ子、堀　一恵、金石邦子、山口玲子	

(2)調査事業の概要

鴻臚館跡調査研究指導委員会　平成８年12月３日に実施。平成８年度調査結果と、９年度調査計画の検討を行った。

鴻臚館跡発掘調査　７年度に引き続いて、平和台野球場北西部の鴻臚館跡関係遺構の有無確認（第１区）と、鴻臚館跡南域の範囲確認（第２区）を目的として調査を実施し、奈良時代から江戸時代までの遺構群の層位的な前後関係を確認した。

ボーリング地質調査　福岡城三の丸東部郭に位置する福岡高等裁判所敷地内における旧地形復元を目的に８地点について実施。平和台野球場と福岡高等裁判所間に浅い谷が湾入していることを再確認できた。

公開事業　鴻臚館跡展示館「情報コーナー」に、平成５年から８年度調査成果説明パネルを、また「鴻臚館の精華コーナー」に鴻臚館跡出土の「中国産陶磁器のふるさと」図版パネルを製作展示した。

第２章　調査の記録

１．平成７年度第31次調査（鴻臚館跡第12次調査）

前章で述べたように、第Ⅲ期調査計画は、平和台野球場撤去後の跡地調査が可能となる時期まで、野球場周辺の調査可能な地点を選択しながら調査を実施して行くというものである。

本年度の発掘調査は、この第Ⅲ期調査初年度にあたる。

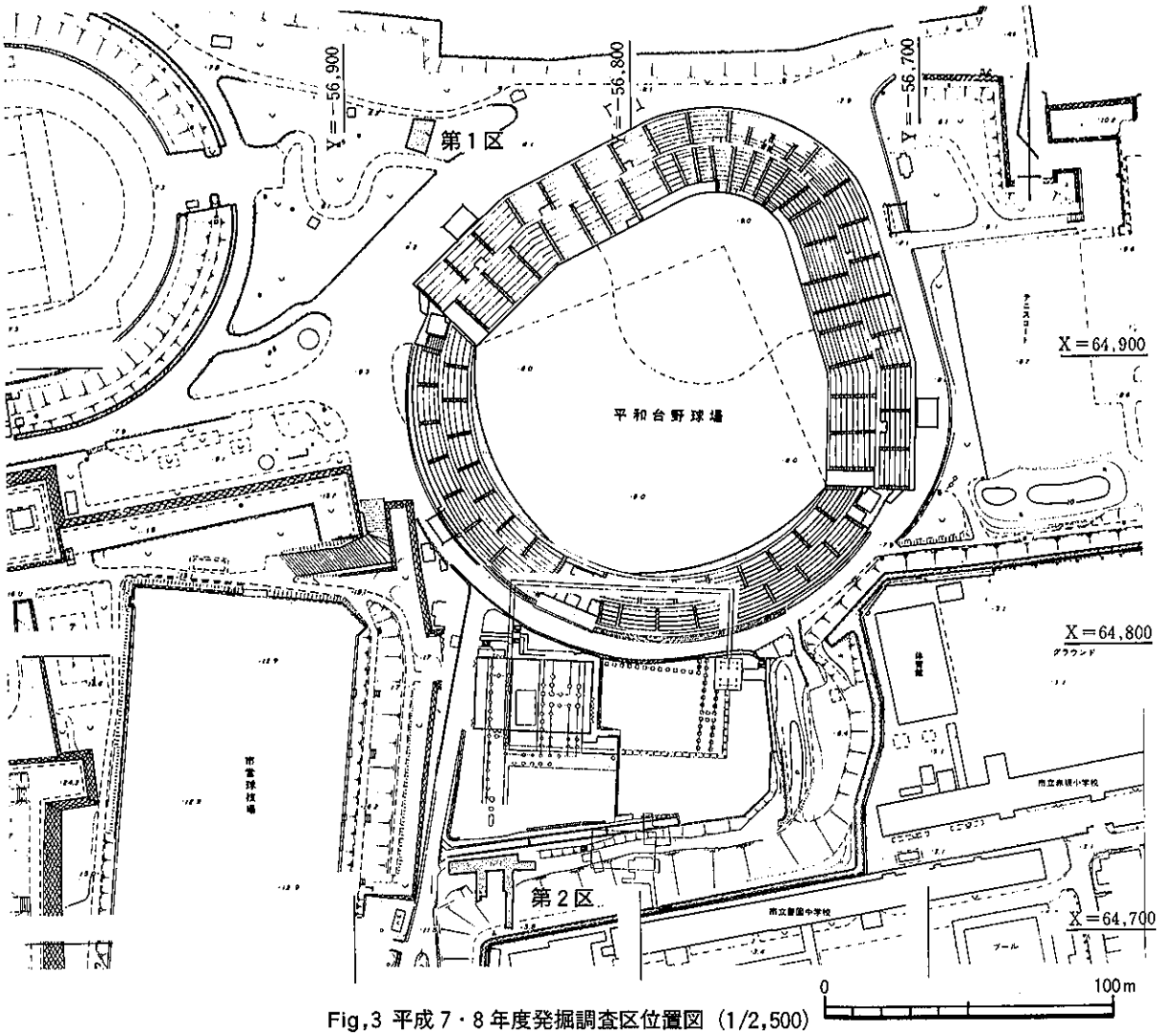
(1)調査区の位置（Fig,３・４、PL,１・２）

第１区は平和台野球場から北西へ約100m離れた地点に位置する。この地点は江戸時代においては五千石を領していた浦上家の城内屋敷地の北東部に位置している。また明治期から昭和前期においては旧陸軍の木造兵舎が建設されていた。調査面積は100㎡である。

第２区は平成元年度～４年度にかけて発掘調査を実施し、平成７年度に整備が完了した野球場外周南側の遺跡公園南縁に位置している。この地点は福岡城跡三の丸中央部南縁に沿って東西に延びる土塁上に位置しており、平成５年度に調査を実施した鴻臚館跡推定南門跡中軸線から西へ約35m離れている。調査面積は280㎡である。

(2)調査の目的

本年度の調査は、第１区においては平和台野球場北西部周辺における鴻臚館関連遺構の有無、第２



Fig,3 平成７・８年度発掘調査区位置図（1/2,500）

区では、第10･13次調査で確認された礎石建物SB31の南側延長部における遺構の有無確認を行い、鴻臚館関係施設の南限域の推定を行うことを目的として実施した。

(3)第１区の調査

1)層序（Fig,5･16）

平成６・７年度のボーリング調査によると、本調査区周辺では現地表面(標高約8.6m)から-1.3mの面以下に福岡城築城時期もしくはそれ以前と考えられる盛土層が確認されている。盛土は第三紀頁岩風化土を主体とするもので、福岡城跡二の丸表御門周辺から濠に向かって、すなわち南から北へ向かって徐々に厚さを増しながら堆積している(Fig,16中b_1層)。本調査区周辺では約５mの厚さで堆積している。

この盛土上には真砂土が約1m厚で堆積しており、大きく２層に分かれる(第８･９層)。今回の調査で検出した遺構はいずれもこの真砂土上面で確認した。上層は明治期以降のもので近代～現代の遺構が確認された。下層の真砂土は盛土造成の仕上げ整地のためのもので、その上面において江戸後期の遺構と遺物を確認した。なお第９層は築城後に数回にわたって盛土されたと考えられる。

2)遺構と遺物（Fig,5･6、PL,1･12）

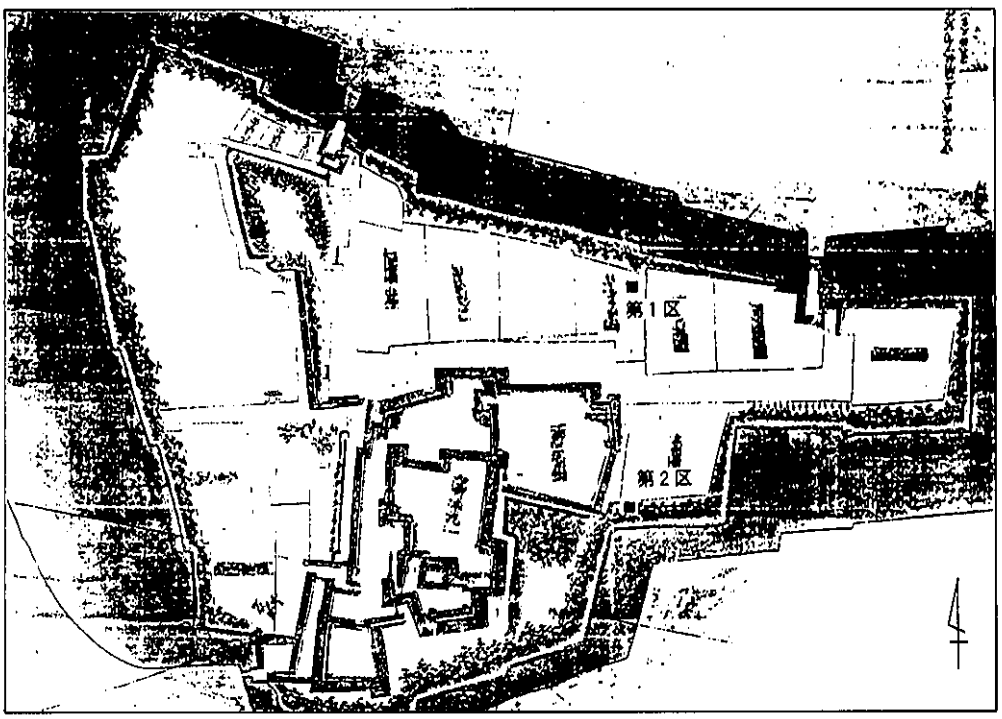
概要

本調査区は明治期以降の破壊が顕著で、遺構・遺物の遺存状況は良くない。検出された遺構は、近現代のものに兵舎跡の一部、それに伴う排水施設、ゴミ焼却用の穴などがある。江戸期のものには、掘立柱建物の柱穴、土壙、溝などである。鴻臚館跡に関する遺構は検出されていないが、五代から北宋代の越州窯系青磁や白磁破片が若干出土している。

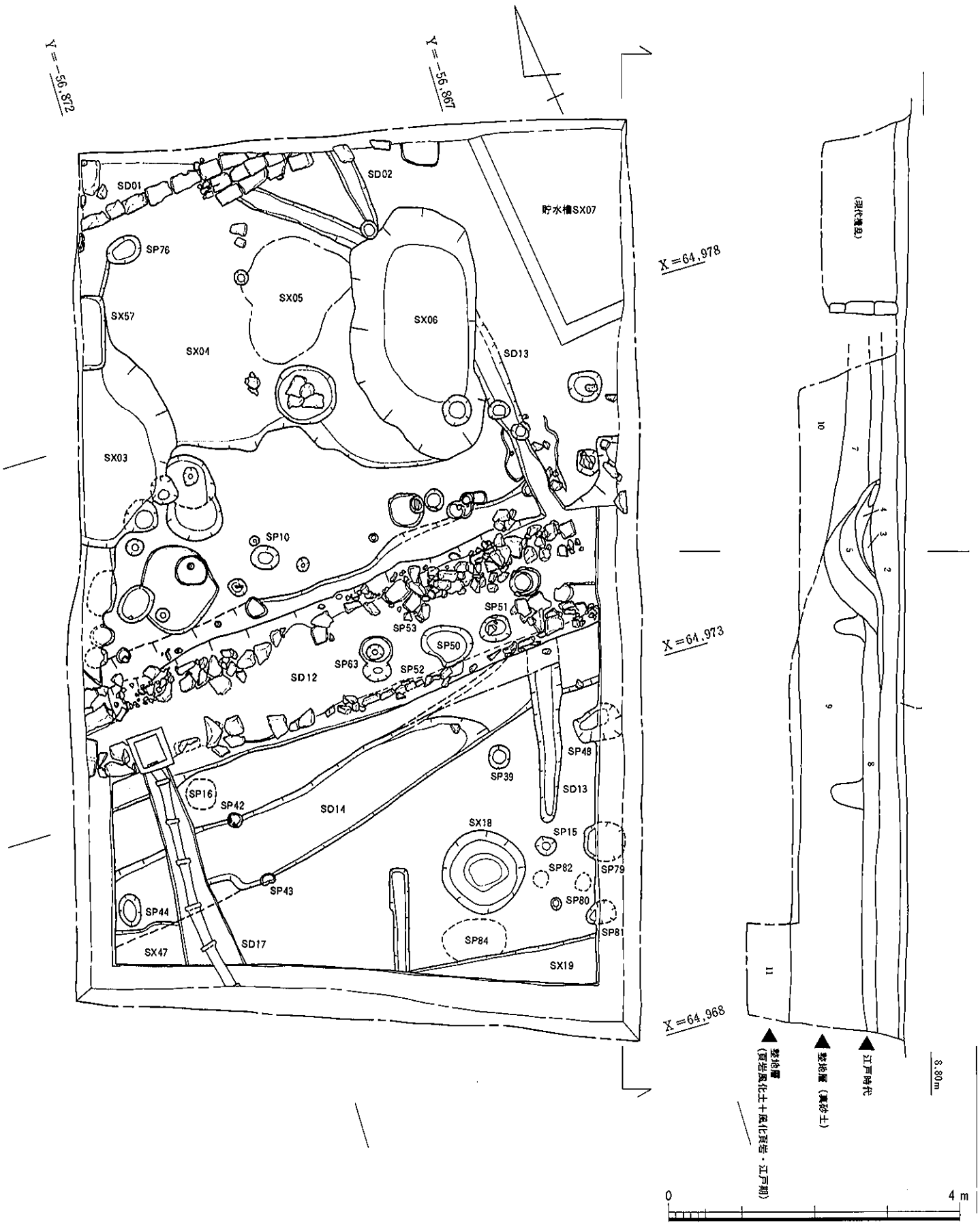
近現代の遺構

溝SD01・02

花崗岩切石を側石とし平瓦を底に貼っている。建物の周囲に巡らした側溝である。SD02はSD01の掘方で、幅40～43cm、深さ20～25cmを測る。明治期～大正期の時期のものと思われる。



Fig,4 『福岡城絵図』（寛政年間以前作成)中における第１･２区推定位置図



Fig,5 第１区遺構分布全体図および土層断面図（1/70）

溝SD12（33）

明治から大正期の溝SD01・02が廃絶されたあと新規に設けられた排水施設である。煉瓦とコンクリートを用いている。なおSD33はSD12の掘方である。昭和期のものと思われる。

SD12出土遺物

6は肥前系施釉陶器椀である。9と同質の製品である。高台径3.2cm、高台径0.6cm。釉調および施文方法は共通する。

7は肥前系陶器椀である。高台径4.8cm、高台高0.7cm。胎土は黒灰色の緻密な泥質土を用いている。内面体部と、内底に白色土による象眼手法で梅花文・界線を描いている。釉薬は透明。

8は肥前系染付椀である。口径10.6cm、器高4.4cm以上。外面にやや粗略化した梅樹文を施文している。釉薬は薄く青味がかった半透明の白色で、呉須はくすんだ藍色である。

9は肥前系施釉陶器椀である。高台径3.2cm、高台径0.6cm。胎土は黒色の陶土を用いている。白釉と透明釉を全面施釉し、ハケ目手風に仕上げている。内面は刷毛先を押しつけ施釉している。

下水SD17

土管を用いた配水施設である。コンクリート造りの貯水槽SX07と同時期のもので平和台野球場建設時期前後のものと思われる。

土壙SX03・04・06

建物の解体廃材を投棄した土壙である。戦後のものと思われる。

SX03出土遺物

19は陶器椀である。天目椀に似る特徴的な器形である。口径9.7cm、器高5.4cm、高台径3.8cm、高台高0.6cm。胎土はきめ細かな泥質土を用い、良く焼き締まっている。口縁部は体部上位で弱く屈曲しながら直立している。高台は全面に褐色がかった透明釉を施釉している。外面の口縁部下には緑青釉を一カ所軽くたらしている。

20は肥前系染付椀である。口径10.0cm、器高5.1cm、高台径4.1cm、高台高0.6cm。外面にやや粗略化した梅樹文を描いている。釉薬は薄く青味がかった半透明の白色で、呉須はくすんだ藍色である。

21は肥前系の施釉陶器椀もしくは鉢の高台部である。高台径は6.1cm、高台高1.2cm。胎土は暗褐色で、ややきめが粗い。全面に刷毛目手による緑がかった褐色釉薬を施釉している。内面見込みは施釉後、輪状に掻き取っている。ケズリ出された高台畳付部には砂目跡が残る。

22は焼塩壺の蓋である。外径8.3cm、天井高1.3cm。焼成はやや不良で焼き締まっていない。胎土には雲母細片を含む。内面天井部には目の細かな布目圧痕が残る。

SX06出土遺物

23は高取系と思われる施釉陶器椀である。高台径4.7cm、高台高1.1cm。体部下半の張りは弱い。高台畳付以外は灰土釉を全面に施釉し、ナマコ釉を施釉している。

24は褐色釉を施釉した盃である。口径7.1cm、器高3.4cm、高台径3.2cm。ケズリ出された高台部は露胎。胎土は赤褐色の泥質土を用いている。

SX07出土遺物

25は土師器皿である。口径8.6cm、器高1.3cm、底径6.3cm。良く焼き締まっている。色調は褐色。底部は静止糸切り離し。内底は横ナデ。

26は土師器皿である。口径9.7cm、器高1.4cm、底径6.8cm。色調は明褐色。底部は回転糸切り離し。

近世の遺構

近世の遺構と考えられるのは溝SD13(34)・14・19、柱穴SP9～11・20～32・35、土壙SX18である。出土遺物からみて、これらの遺構は18世紀半ばから幕末にかかる時期が考えられる。

溝SD13(34)

調査区の東壁に沿って検出した。弧を描きながら北西へ延びている。幅35～45cm、深さ10～15cmで遺存状況は良くない。断面形は浅皿状である。SD12から切られ、SD14を切っている。埋土は褐色砂質土である。

SD13出土遺物

10は瓦質の壷または鉢の底部破片である。底径5.9cm。焼成はあまく脆い。内外面とも黒灰色に燻されている。

溝SD14

調査区中央からやや南側で検出した。溝SD12とはやや走向が異なり、SD01にほぼ平行する。幅は約１m、深さは10～15cm。遺存状況は良くない。埋土は暗褐色砂質土。遺物は土師質の焙烙破片、肥前系染付や唐津系陶器などの小片が出土している。

溝SD19

調査区南東部で検出した。溝もしくは浅い土壙と考えられる。幅は不明、深さは10cmほどで浅い。SD14と平行している。

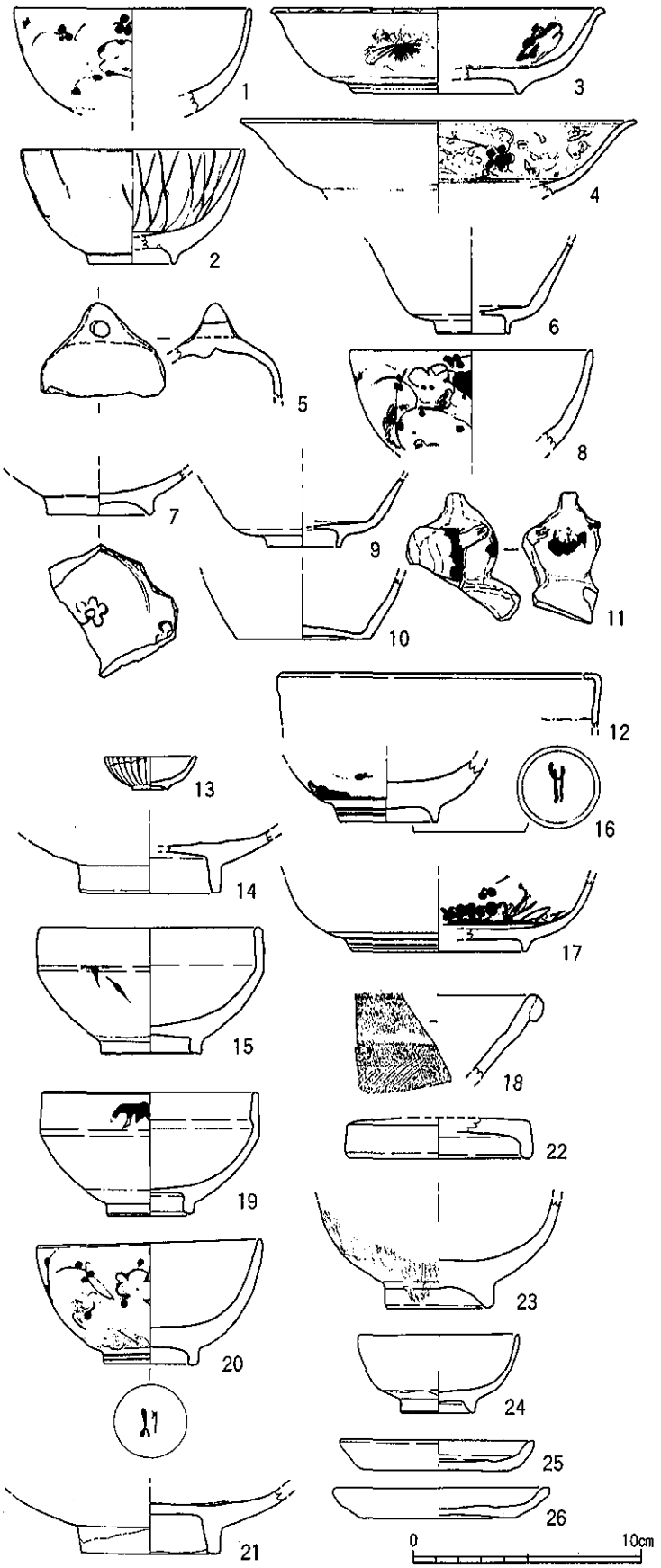
柱穴SP9～11・20～32・35

溝SD12の北側を中心に分布している。掘方は15～30cmを測る。掘立柱建物または柵列・板塀等の一部と考えられる。

SP15出土遺物

11は肥前系染付水滴である。現存高6.6cm、注口部外径0.6cm。人が瓢箪を抱える構図になっている水滴で、着物袖口と瓢箪に淡い藍色の呉須を施している。

12は高取系の施釉陶器鉢の口縁部破片である。口径14.1cm。器壁は薄く厚さ0.2～0.3mm。胎土は黄赤褐色でややきめが粗い陶土を用いている。体部は筒状



Fig, 6　第１区出土遺物実測図(1/3)

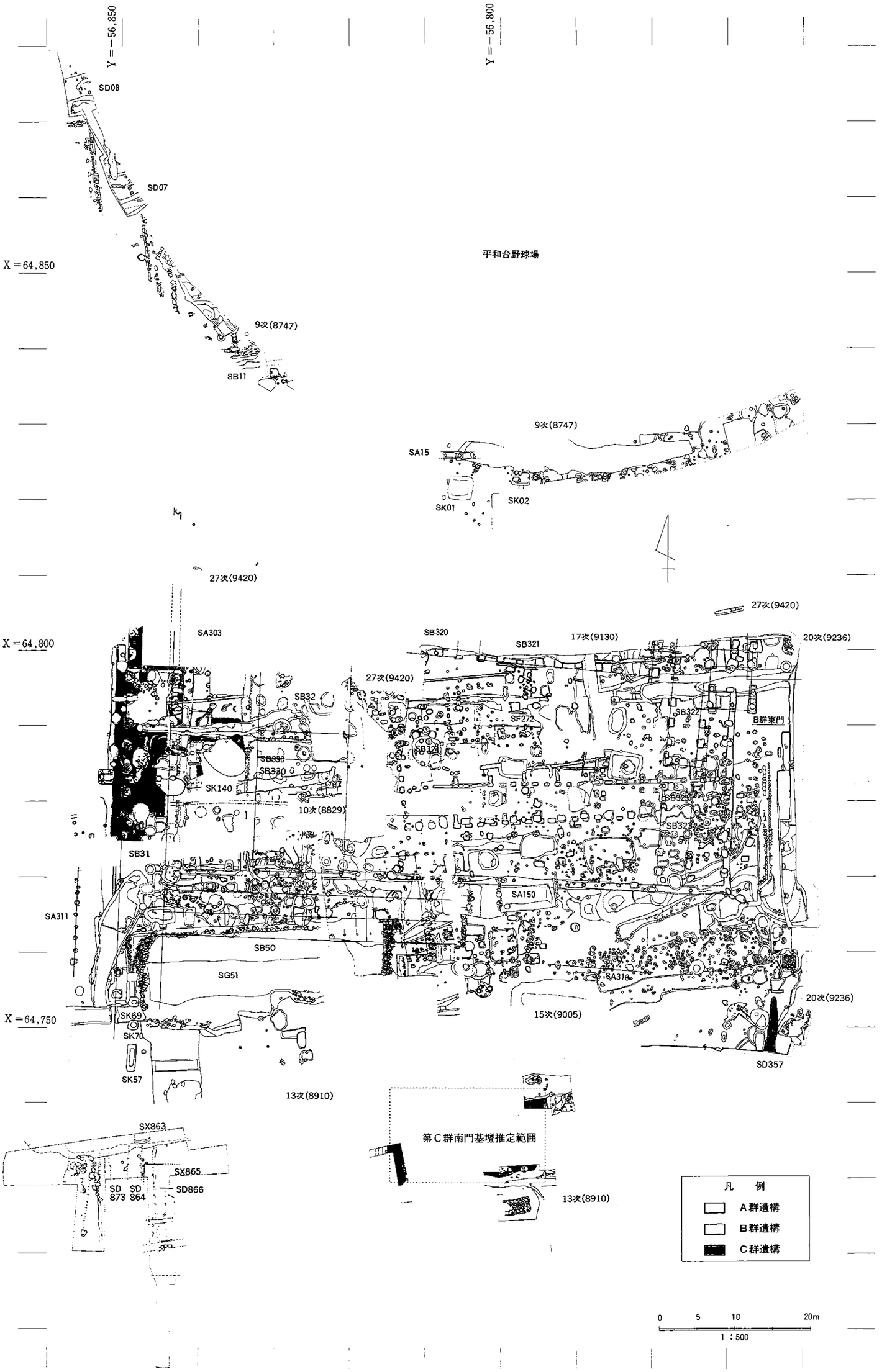


Fig. 8 第2区配置図2 (1/500)

平成8年度調査第2区

に直立し、口縁部は内側にほぼ水平に引き出されている。内外面には褐色の鉄釉が施釉されている。

SP35出土遺物

13～17は肥前系陶磁器である。

13は白磁紅皿である。型作りによる。口径4.0cm、器高1.4cm。内面から口縁部外面に透明釉が薄くかかる。

14は施釉陶器皿もしくは鉢高台部破片である。高台径6.1cm、高台高1.2cm。胎土はややきめが粗く灰色を呈する。全面に灰緑色の透明釉を施釉し、内底見込みは輪状に釉薬を掻き取っている。

15は施釉陶器椀である。19と同質の製品である。口径9.6cm、器高5.5cm、高台径4.5cm。高台高0.5cm。胎土はきめ細かな泥質土を用い、良く焼き締まっている。口縁部は体部上位で弱く屈曲しながら直立。高台部を除いて全面に褐色がかった透明釉を施釉している。外面体部に緑青釉を一カ所軽く垂らし細い草葉文を描いている。

16は染付椀である。高台径4.3cm、高台高0.7cm。外面には淡い藍色で梅花文を施文している。

17は染付皿である。高台径7.8cm、高台高0.6cm。内面には草花文が、外面には唐草文がみられる。

SP49出土遺物

18は肥前系陶器擂鉢口縁部破片である。胎土は黒灰色を呈し、外面に鉄釉を薄く施釉している。口縁部は玉縁状になる。降ろし目の単位は８条が一単位。

土壙SX18

調査区南側で検出した。掘方平面形は直径0.8mの円形で、断面形は逆台形のゴミ焼却用の土壙である。木片や瓦破片が出土している。幕末以降のものと思われる。

表面採集、表土出土遺物

１～４は肥前系染付である。

１は椀である。口径10.5cm、器高4.5cm以上。外面には粗略化された梅樹文を施文。呉須はやや暗い藍色。

２は椀である。口径9.8cm、器高５cm、高台径3.9cm、高台高0.4cm。内外面に網目文を施文。破片の一部はSP35出土品と接合した。内面の網目は直線的である。

３は皿である。口径14.3～14.5cm、器高3.1cm、高台径6.4cm。体部下半は丸く張り、口縁端部は強く外反している。内外面にそれぞれ４カ所の桐文が押印されている。口縁端部は押圧され花弁状になる。呉須は薄い藍色。

４は皿である。口径17.5cm、器高3.1cm以上。体部下半の張りは弱い。口縁端部はわずかに外反している。内面には梅樹文を鮮やかな藍色で描いている。見込み内底部の文様は不明。焼成および釉薬の発色は良好。

５は土鈴である。体部径は5.4cm。孔径0.8cm。焼成良好。明褐色。

(4)第２区の調査（Fig,７～９、PL,２～７･13）

1)層序（Fig,11･12）

第２区東側トレンチで確かめられた土層層序は次のようになる。なおこの土層所見は８年度調査時の所見も加味して記述している。

第１～５層

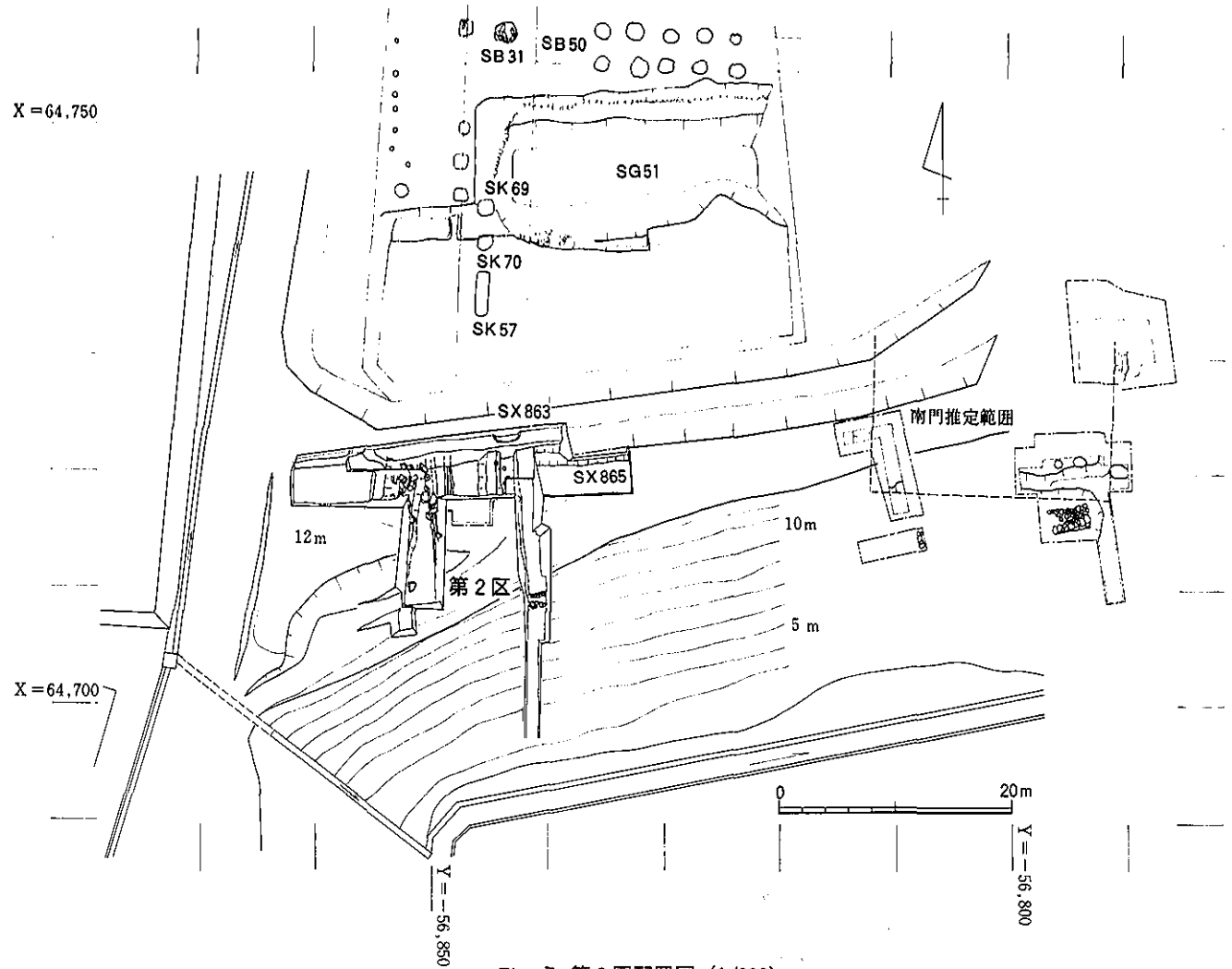
近世以降の表土層および盛土層である。盛土層は、土塁構築のために盛られたもので、第三紀風化頁岩・風化土を主体とする赤褐色や褐色粘質土で、大きく４層に分けられる。平坦に整地された第６層上面が基底面である。盛土の行われた時期は、第６層および盛土最下層の第５層の出土遺物からみて、遡って17世紀半ば以降と考えられる。

第６・７層

中世末期～近世前期の遺物包含層である。第６層は灰色混砂粘質土層で炭化物を多く含む。石英砂を含んでおり真砂土が混入している可能性がある。この層の直上に福岡城土塁の盛土がのる。土質の異なりから細分が可能である。第７層は暗灰褐色混砂粘質土で、部分的に遺存しているが、南側へ行くにつれ遺存状況は良くなる。これらの層から出土する遺物は古代の瓦を主として、中国産越州窯系青磁・北宋～五代白磁・須恵器・土師器・龍泉窯系青磁などが出土している。また第６層からは染付破片が出土している。いずれも細かく砕け二次的に磨耗している。

第8-1層

古代から中世後期の遺物を含む暗褐色粘質土で、調査区北西部から南東部に向かって徐々に厚みを



Fig,７ 第２区配置図（1/600）

増して堆積している。堅く締まった土層で、人為的に整地されたもので、遺物からみて中世後期、15世紀以降の時期が考えられる。

第8-2層

古代の遺物を多く含む暗褐色～褐色の粘質土層でSD866を直接覆っている。第8-1層との境はやや不明確な不整合で、第8-1層よりも堅く締まっている。調査区北西部から南東部に向かって徐々に厚みを増しており、人為的に整地されたものと考えられる。古代の瓦破片を大量に含んでおり、越州窯系青磁等の遺物は少ない。遺物はすべて細かく砕け二次的に磨耗している。遺物からみて平安時代中期、10世紀後半以降の時期が考えられる。

第９層

SX865を直接覆う褐色粘質土である。分布範囲はせまく、SX865の掘方北壁から南側に向かって薄く堆積している。古代の瓦を主として、越州窯系青磁や五代期の白磁などの小片がわずかに出土している。

第10層

SX865内に堆積する褐色粘質土で、白色の頁岩風化土小塊を多く含む。須恵器や瓦を含んでいる。遺物はいずれも小片で磨耗している。堆積のあり方から見て人為的に埋め戻されたものと考えられる。平成８年度の調査で出土した須恵器杯からみて、奈良時代前半から半ば以降の時期が考えられる。

2)遺構と遺物（Fig，8～12、PL，2～7・13）

今回の調査で検出した遺構は、福岡城跡土塁の他に、中世後期の地下式横穴SX863、溝状遺構SD866、布掘状の遺構SX865である。遺物は土塁盛土および第８層から主に出土しているが、いずれも小片が多く、また磨耗しており図示できるものは少ない。

福岡城跡土塁

調査区周辺の土塁北側法面は、昭和25年頃のテニスコート建設の際に大きく削られ本来の形状を失っている。すでに述べたように、土塁は基底面である第６層上面に風化頁岩、頁岩風化土を主体に盛土を行い構築しており、基底面での幅は13m以上、現存高は先述した第６層上面から約２～2.5mほどの高さである。本来の高さは３m前後はあったものと推定される。平成８年度に新たに設定した西側トレンチでは、盛土を行う前に、それまで溝状に窪んでいた箇所に一抱え以上もある角礫や扁平な礫石を埋め込み、標高9.4m前後の高さで基底面を整地した後に盛土を行っている。盛土の初期段階にあたる第５層は10㎡前後の広さでまとまりながら第６層上面に点在していることから、必要個所に盛土の小山を築き、全体的な盛土作業が一斉に行われたものと思われる。版築が行われた形跡はないが、土質の違いを考慮しながら結果的に堅く締まるように盛土を行っている。平成７年度調査の潮見櫓周辺および三の丸東郭土塁と比較して丁寧な造作である。

表採・福岡城跡土塁表土・盛土内出土遺物

27～39は肥前系の染付・陶器である。

27は紅皿である。口径5.0cm、器高1.7cm。型作りによるもので、内面から口縁部外面に透明釉が薄くかかる。

28は紅皿である。口径5.0cm、器高1.7cm。器壁厚0.35cm。型作りによるもので、外面には蛸唐草文を施しているが文様細部はつぶれ不鮮明である。釉薬はわずかに青みがかった透明釉を全面に施釉している。

29は紅皿である。口径5.1cm、器高2.6cm、高台径1.4cm、高台高0.2cm。外面に竹文を施文。呉須はくすんだ藍色である。器壁は薄く体部は丸く仕上げられている。型作りによるものか。

30は盃である。口径7.8cm、器高3.5cm、高台径2.8cm、高台高0.6cm。体部は緩やかに弧を描きながら外反している。釉薬は不透明でやや灰白色がかっている。

31は椀である。口径10cm、器高4.6cm、高台径4.1cm、高台高0.9cm。外面には梅花文が施文されている。釉薬は薄く青みがかった不透明釉で、呉須は暗くくすんだ藍色である。

32は皿である。口径13.6cm、器高3.7cm、高台径5.0cm、高台高0.6cm。口縁部は波状に成形している。全面に薄く青みがかった透明釉を施釉している。内底見込は輪状に掻き取っている。高台畳付部には砂目跡が残る。

33は椀である。いわゆる広東椀と呼ばれるものである。口径11.6cm、器高6.2cm、高台径5.9cm、高台高1.6cm。外面には梅花文、内底見込には「壽」を描いている。

34は皿である。口径13.6cm、器高4.1cm、高台径4.0cm、高台高0.7cm。全面に薄く青みがかった透明釉を施釉している。内底見込は輪状に掻き取っている。高台畳付部には砂目跡が残る。

35は皿である。口径13.8cm、器高4.2cm、高台径8.3cm、高台高0.5cm。内面には直線的な編目文を二段施文している。内底見込にはコンニャク印判による五弁花文が、また外底には渦福文を描いている。呉須はくすんだ藍色である。

36は小形瓶である。仏前具。口径1.8cm、器高7.5cm、胴部径3.0cm、高台径3.0cm。張りの弱い肩部に梅花をくすんだ藍色の呉須で描いている。

37は瓶である。現存高8.6cm、胴部最大径7.8cm、高台径6.0cm。胴部外面には草花文を施文している。釉薬はうすく青みがかっており、呉須はくすんだ藍色である。

38は蓋である。口径10.6cm、器高3.0cm。外面には芙蓉手文を配している。内面天井部には花文が描かれている。

39は鉢である。口径18.8cm、器高6.0cm、高台径10.2cm、高台高0.5cm。高台内面を除く全面に薄く透明釉がかかる。

40は明代末期の染付鉢と思われる。小片のため口径は不明。口縁部は大きく外反した後に端部を上方に引き出し稜花とする。内外面に芙蓉手文を配し、口縁内面は釣人を配した山水を描く。胎土は精良で白色。薄手である。釉薬の発色は良好で呉須は明るい藍色を呈す。

41～46･49は越州窯系青磁である。

41は椀である。高台径は8.1cm、高台高は0.5cm。胎土は微細な白砂を含むが精良。底部は輪状にケズリ出している。内面および底部外縁に目跡を残す。体部外面下半は露胎である。

42は椀高台破片である。高台径6.6cm、高台高0.4cm。高台はヘラ削りだしによる蛇の目高台で畳付き幅は1.5cm。畳付外縁に目跡が付く。釉薬の発色は不良でくすんだオリーブ色である。

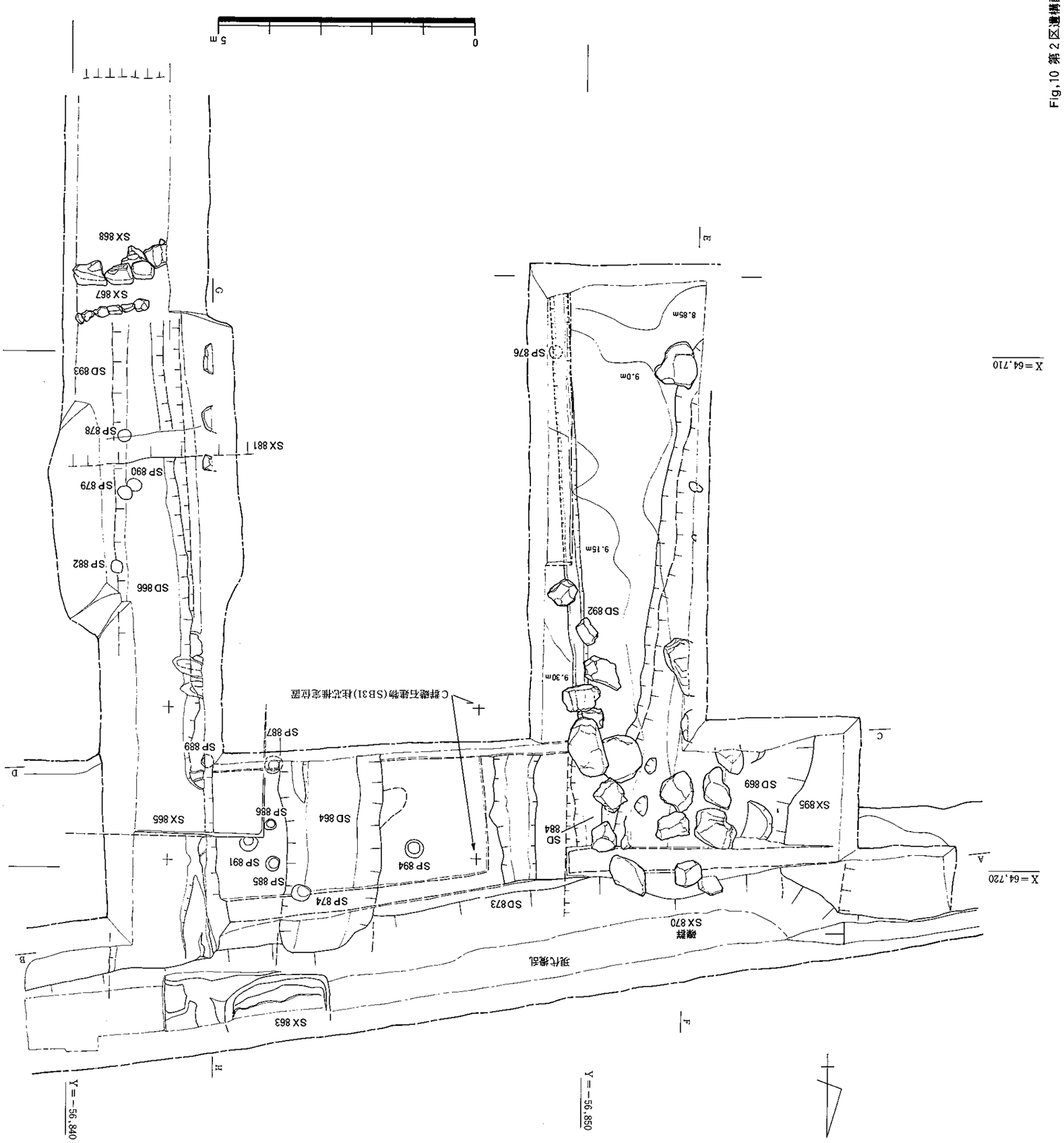
43は椀である。高台径8.1cm、高台高0.5cm。高台は輪状にけずり出している。釉薬は発色良好で、灰緑色がかり全面に施釉している。内底見込および高台外縁に目跡を残す。

44は椀である。高台径7.4cm、高台高0.6cm。輪状高台は外報に向かってハの字形に広がり、畳付および内面見込には目跡を残す。釉薬は半透明の灰緑色。

45は椀である。底部系7.4cm。胎土は細かな白砂、鉄分の吹き出しと思われる黒色斑を含みややきめが粗い。釉薬の発色は悪くくすんだオリーブ色である。体部外面下半は露胎である。内面および上げ底の底部外縁に目跡を残す。

46は椀である。口径14.5cm、器高4.9cm、高台径5.8cm、高台高0.5cm。口縁部は玉縁状に肥厚し、わずかに外反している。底部は上げ底で体部の丸みは弱い。胎土は精良で灰色を呈し、微細な白砂、黒色斑を含む。釉薬は化粧掛けの後、内面から体部上半にかけて施釉している。

Fig.10 第2区遺構配置図(1/80)



49は水注胴部破片である。胎土・焼成ともに良好。肩から胴部中位にかけてヘラ先により施文。釉薬は薄く灰緑色がかった透明釉である。

47は白磁椀高台部破片である。回転ヘラケズリによる蛇の目高台で、高台径6.1cm、高台高0.5cmを測る。胎土は緻密精良で白色。高台部を除く全面に薄く灰白色がかった透明釉を施釉。

48は白磁椀高台破片である。回転ヘラケズリによる蛇の目高台で、高台径7.0cm、高台高0.6cm。胎土は精良で、透明釉を全面に施釉。高台畳付部は釉を掻き取っている。畳付き部外縁は研磨されすり減っている。

盛土第５層出土遺物

50は土師器皿である。口径8.3cm、器高1.2～1.5cm、底径6.2cm。底部には回転糸切り離し痕が残る。口縁端部には炭化物が付着している。灯明皿として用いられたもの。

51は土師器皿である。口径7.9cm、器高1.2cm、底径6.1cm。底部には回転糸切り離し痕が残る。口縁端部には炭化物が付着している。灯明皿として用いられたもの。

52は肥前系染付椀と思われる。口径9.5cm。器面は火を受けて焼けただれており文様は不明。

53は中国製と思われる緑釉陶器壷破片である。器形は唾壺の可能性がある。胎土は灰白色のややきめが粗い泥質土を用いている。焼成良好。堅く焼きしまっている。明るい緑色を帯びた薄い透明釉が表裏面にかかる。釉薬には細かな氷裂が見られる。

54・55は龍泉窯系青磁椀である。いずれも青緑色の半透明釉を施釉し発色はあまり良くない。鎬蓮弁文を外面に施している。54の蓮弁は平坦で、鎬がやや不明瞭である。

56は白磁椀口縁部破片である。口径16cmほど。口縁玉縁はやや小さい。胎土は精良白色。明白色がかった半透明釉を全面に施釉している。

地下式横穴SX863

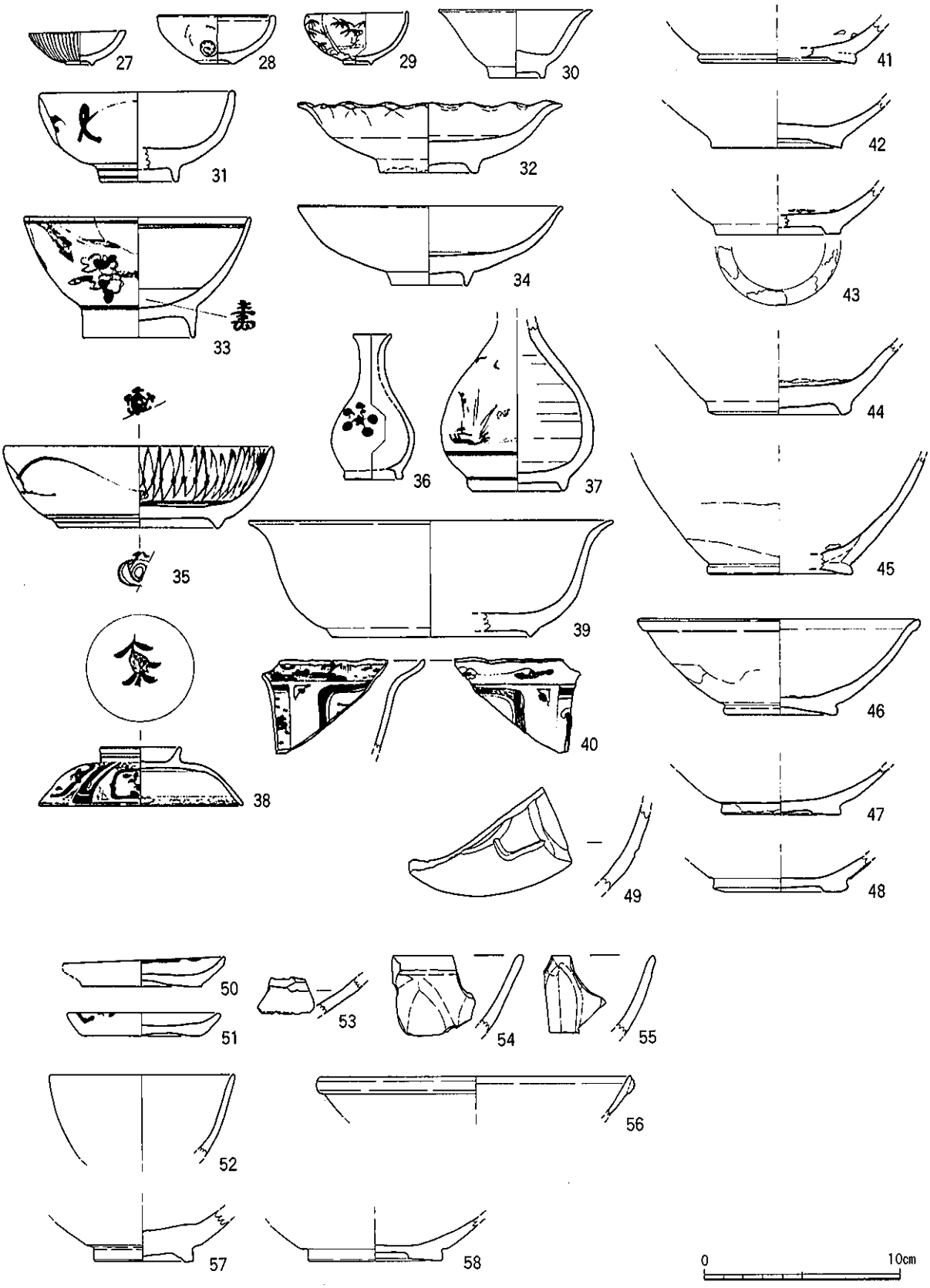
調査区北壁にかかって検出された。これまでの球場外周南側（旧テニスコート）部分の調査では地下式横穴は３基確認されている。竪坑部は北側に位置しており、確認できたのは奥壁と東西側壁の一部である。昭和20年代の掘削によって上半部は失なわれている。床面は東西に1.95m、南北0.7m以上を測る。床面は平坦に整えられており、標高7.1mを測る。奥壁および東西側壁はほぼ直角に床面から立ち上がり、高さ0.8mあたりでオーバーハングしながら天井部へ続いている。天井部の形状は不明であるが、その断面形は蒲鉾形をなしていた可能性がある。遺物は古代瓦片を初めとして越州窯系青磁・白磁等の小片が出土している。

溝状遺構SD866

東側トレンチにおいてその一部を検出した。ほぼ南北に延びる溝状の遺構である。幅0.5～0.7m、深さ0.2～0.25mを測る。断面形は浅皿状で、床面は南へ向かって緩やかに低くなりながら延びている。平成５年度調査で確認された礎石建物SB31の東側柱列の延長線上に位置している。この溝状遺構の西側に接して、一段高い基壇状の高まりがあることから、検出当初は建物等の何らかの基壇の周囲を巡る溝と考え、南側延長部において西側に曲がると予想したが、８年度の南側延長部の調査では南へさらに延びていることが確認された。したがって、当該溝状遺構の性格については、西側の基壇状の高まり部分の性格づけと合わせて検討する必要がある。床面を直接覆う第8-2層からの出土遺物からみて、10世紀後半以降の時期が考えられ、礎石建物SB31よりも新しい時期のものと思われる。

第８層（溝状遺構SD866内埋土）出土遺物

57は越州窯系青磁椀または壷の高台破片である。高台径5.1cm、高台高0.7cm。胎土は灰白色で精良。全面に明るいオリーブ色の透明釉を施釉。細かな氷裂が見られる。高台畳付には目跡が残る。



Fig，9　第２区出土遺物実測図（1/3）

58は白磁高台部破片である。高台径6.9cm、高台高0.6cm。胎土は白色で精良。薄く灰白色がかった透明釉を薄く施釉している。高台畳付部は釉薬を掻き取っている。

布掘状遺構SX865

東トレンチ第９層直下で、垂直に掘削された壁面を確認した。床面からの壁面の高さは0.15～0.22ｍである。東側は削平されて低くなっている。壁は東西に延びており、先述した溝状遺構SD866とほぼ直角に交叉している。壁の一部はSD866から削平されている。掘削の方法と埋土の堆積状況は、昭和62年度および平成元年・３～４年度調査の布掘遺構SA150・301・303・SA15と近似しており、またその方向性が平行することから、鴻臚館跡遺構Ｂ(旧第Ⅰ期)群の一部をなすものと思われる。ちなみに、SA150南壁から当該北壁の距離は、40.5ｍ(135尺/30cm、136尺/29.8cm)を測る。遺物は古代瓦および須恵器の小片が若干出土している。

(5) 小結

今年度の調査は、第１区では平和台野球場北西部における鴻臚館関連遺構の有無確認、第２区では鴻臚館跡推定範囲の南限域の確認を主な目的として実施した。以上の調査結果をまとめると、以下のようになる。

1)第１区

江戸時代の遺構は、浦上家屋敷地内北東部にあったと考えられる建物跡等の一部で、江戸時代末期の頃の所産と思われるが、調査区が狭いことと、近現代の遺構によって破壊されている箇所が多いことから、建物の配列等については関連づけられなかった。また、福岡城築城時から江戸時代後期にかかる遺構については明確ではなかった。これらの遺構ののる真砂土は江戸時代から明治期における数回の整地によるもので、大きく２層に分かれていることから今後の周辺調査によって時期別の遺構確認が可能と思われる。

鴻臚館跡に関しては今回の調査では確認できなかった。先に述べた真砂土層下部には、第３紀頁岩風化土を主とする盛土層(Fig,16中のb_1層)がみられるが、仮にこの盛土層が福岡城築城期のものとすると、鴻臚館跡の遺構は、本調査区周辺で厚さ約５ｍに達する盛土を除去しその下面を精査する必要がある。ただし今回の調査では、盛土造成時期については確証が得られていないために、次年度調査の課題としたい。

2)第２区

福岡城跡土塁の構築時期については、盛土下層から出土した染付破片の出土(52)によって、江戸時代初頭まで遡らないことが明らかとなった。ただし、平成２年度の鴻臚館跡南門推定地の調査で明らかになったように、土塁の崩落に伴う築造改修が行われた可能性もあり、南縁部土塁全体の築造時期をどの時期に考えるかは今後の調査を待って検討したい。

土塁下部では、比較的良好に古代から近世にかかる時期の遺物包含層が遺存しており、土塁部分の調査によって、奈良時代から室町時代にいたる層位的な遺構の変遷過程を明らかにできる可能性が高いことがわかった。特に鴻臚館跡に関しては、鴻臚館跡遺構Ａ群(旧第Ⅰ期遺構群)の東門および塀の布掘遺構と類似する布掘状の遺構SX865が検出できた。一部のみの確認に留まっているためにその性格については確定できない。これまでの調査で確かめられた建物跡等との位置関係も検討しながら、８年度調査の主要課題としたい。

２．平成８年度第35次調査（鴻臚館跡第13次調査）

(1)調査の目的

第１区は、７年度調査によって江戸期の遺構群(柱穴・溝・土壙)と、明治期の建物跡を検出したが、これらの遺構群がのる真砂土整地層(第９層)下部に堆積する頁岩風化土が江戸期のものか、鴻臚館(筑紫館)期の造成によるものなのかを明らかにすることを調査目的とした。

第２区については、７年度調査で確認された東側トレンチの布掘状遺構SX865の形状把握および掘削時期の推定、礎石建物SB31の南側延長部における遺構の確認を調査目的とした。

(2)第１区の調査（Fig,５）

東壁および南壁に沿って幅1.2m、深さ1.4mのトレンチを設定し、整地層の堆積状況を観察した。その結果、花崗岩風化土を主体とする第９層の下部に、風化頁岩と頁岩風化土の粘性の高い盛土(第11層)が堆積していることがわかった。

1)遺構と遺物

第９層上面に江戸時代および明治期～現代までの遺構が重複して分布している。これらの遺構については前節で述べたので省略する(９～13頁)。下層の第11層上面では遺構は確認できなかったが、遺物は古代の瓦破片が若干出土している。

2)第１区周辺における盛土の状況（Fig,16)

平成７年度のボーリング調査の所見では、標高2.5mの面に海岸性砂土が北に向かって厚くなりながら堆積しており、その面から標高約7.5m前後の面までが風化頁岩礫と風化土の混合した盛土層がみられる。この盛土は先述した第11層に相当する土層である。この盛土中において、標高約５mの面に地耐圧N値の異なる面があることが確認されている。また断面想定A-B断面第４地点(Fig,16中b_1層)では標高約４m面で布目瓦がサンプリングされている。これらのことから、盛土層が大きく２層に分離できる可能性がある。

(3)第２区の調査

1)調査区の設定

調査区は、平成７年度調査区を一部拡張し、また部分的に土塁盛土下部まで掘り下げて調査を実施した。

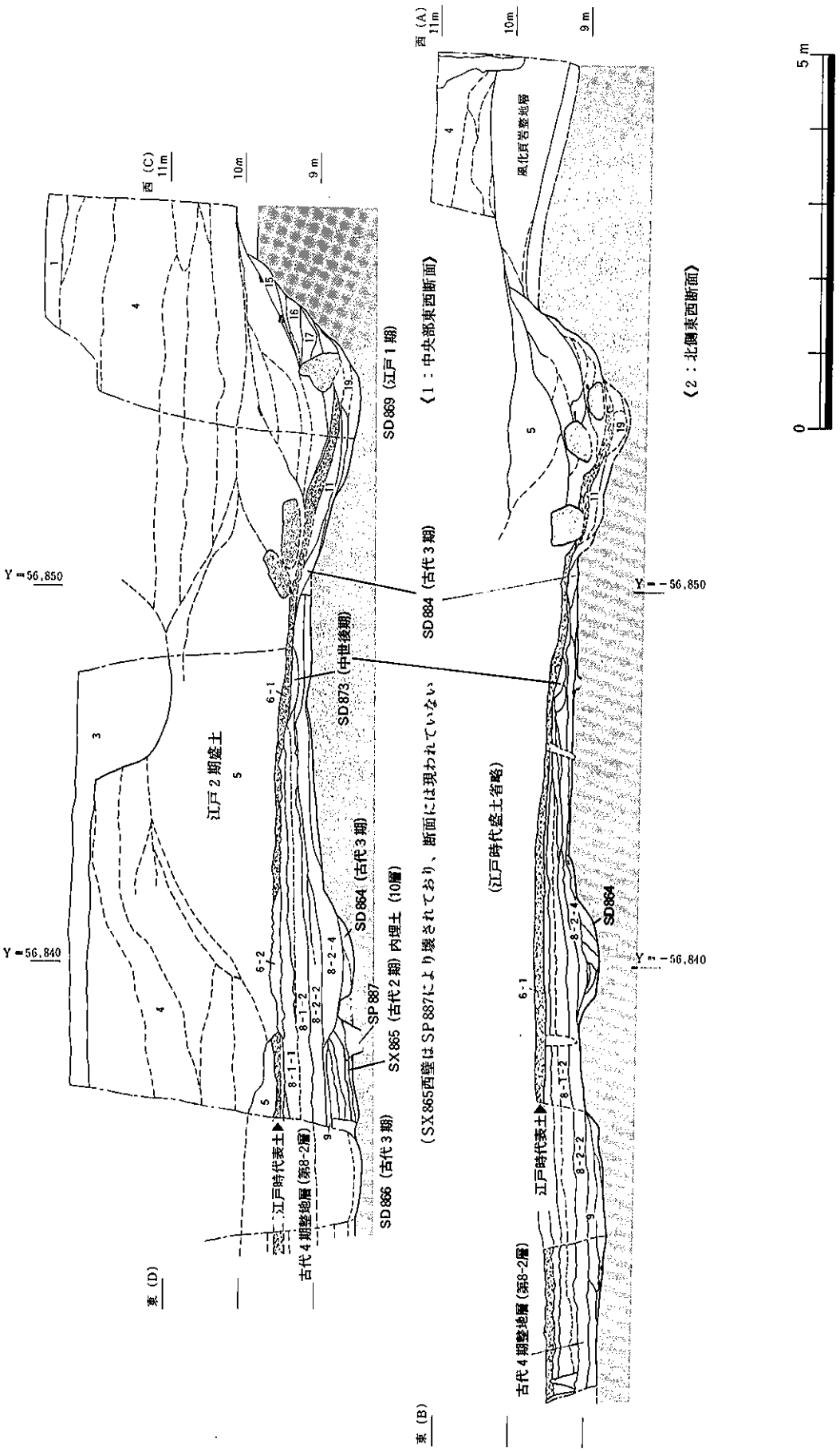
2)層序

本調査区の土層堆積状況についてはすでに述べた(14～15頁)ので、ここでは８年度調査で得られた新所見と、これまでの調査成果も合わせて旧テニスコート部分の土層堆積の状況を概観する。

第２区においては、上層から、江戸期の土塁盛土(第２～５層)、江戸期表土(第6-1層)、中世の遺物包含層(第6-2、７層)、古代の遺物包含層(第8-1・8-2層、第12・13層)、地山(頁岩風化土)に大別できる。なお、礫群SX870を直接覆う第15～17層、および溝状遺構SD869の埋土である第11層等は近世初頭以降の堆積土である。

土塁は、すでに述べたように、風化頁岩を多く含む粘質土を大量に盛土している。地表面をならす際に、溝SD869には風化土とともに礫石を埋め込んでいるが、これらの礫石の下部に江戸期表土(第6-1層)が潜りこんでいることから、少なくとも調査区部分の現存する土塁の構築は江戸時代に入ってしばらく経った時期以降のものと考えられる。

江戸期表土層はこれまでの調査でほぼ全域にわたって確認されている。平安時代の礎石建物群の礎石は、この層に覆われるかまたは、その上部がこの層からわずかに表出している状況で遺存している。



Fig,11 第２区土層断面図１（1/80）

中世包含層(第6-2･７層)は、これまでの土塁の調査(平成２年度南門・内堀内壁等の調査)と、平成４年度調査でも確認されており、標高約9.2～9.3m前後の面にみられる。出土遺物から見て中世後期室町期のものと考えられる。本調査区の西側に位置する平成４年度調査区では、標高8.5m前後の面にこの層が連続していることから、中世後期の段階で、鴻臚館跡推定域南西部は東南方向に向かって低くなっていたことが考えられる。遺構の遺存状況からみて南西部分は人為的に低く削平された可能性が高い。ちなみに展示館中央部と推定域南西部の比高差は約１ｍである。

第8-1層については前節で述べたので省略する(14頁)。

古代の包含層は、第8-2層、第９層、第10層、第14層(SD884埋土)である。

第8-2層上面は標高9.0～9.2mを測る。平成元年・２年度に確認された礎石建物SB31を覆う整地層で、平成元年度調査区から東側および本年度第２区周辺にかけて広く分布する。第8-1層は龍泉窯系および同安窯系の青磁破片を含み、上面では中世後期～末の溝SD373が検出されていることから、第8-2層は10世紀半ば～後半以降を上限として13世紀代頃までの間に整地されたと考えられる。

第９・10層については前節で述べたので省略する(15頁)。

地山整地層(9-2層)は、地山直上を覆う薄い土層で、布掘状遺構SX865の上面と段下の地山面に薄く堆積している。溝SD864・SD866はこの層を切って掘削されている。

地山は、調査区内ではほぼ8.2～9.0mの高さで残っている。ただし、調査区西端では、標高約9.9mの高さで遺存し、一段高い地山面がある(SX895)。礎石建物SB31周辺に残る地山面は9.1m前後であるので、約0.8～１m前後の比高差があったことになる。平成元～２年度調査の各調査区西側ではこの段差は確認されていない。したがってこれらの調査区では、後世において削平されたか、あるいは本来なかったと考えられるが、このSX895は鴻臚館跡の南西隅を推定する上で重要と思われる段差である。本調査区の西側に隣接する管理道路および福岡城二の丸部分の調査を待ってSX895の性格については今後検討してゆきたい。

3)遺構と遺物

今年度の調査で新たに確認した遺構は、

江戸時代の溝SD869・礫群SX870・柱穴SP874・段落ちSX881・石列SX867・SX868

中世後期の溝SD873・溝SD892

古代の溝SD864・SD884・柱穴SP882・879・890・878・876・984・885・891・886・887・889

である。

また、布掘状遺構SX865については北壁と直交する西側壁を新たに確認した。

出土遺物は、古代瓦を主として、中国産陶磁器、新羅焼、土師器・須恵器・肥前系染付等が出土している。いずれも細片で磨耗している。

江戸時代の遺構

福岡城跡土塁　前節で述べたので省略する(15頁)。

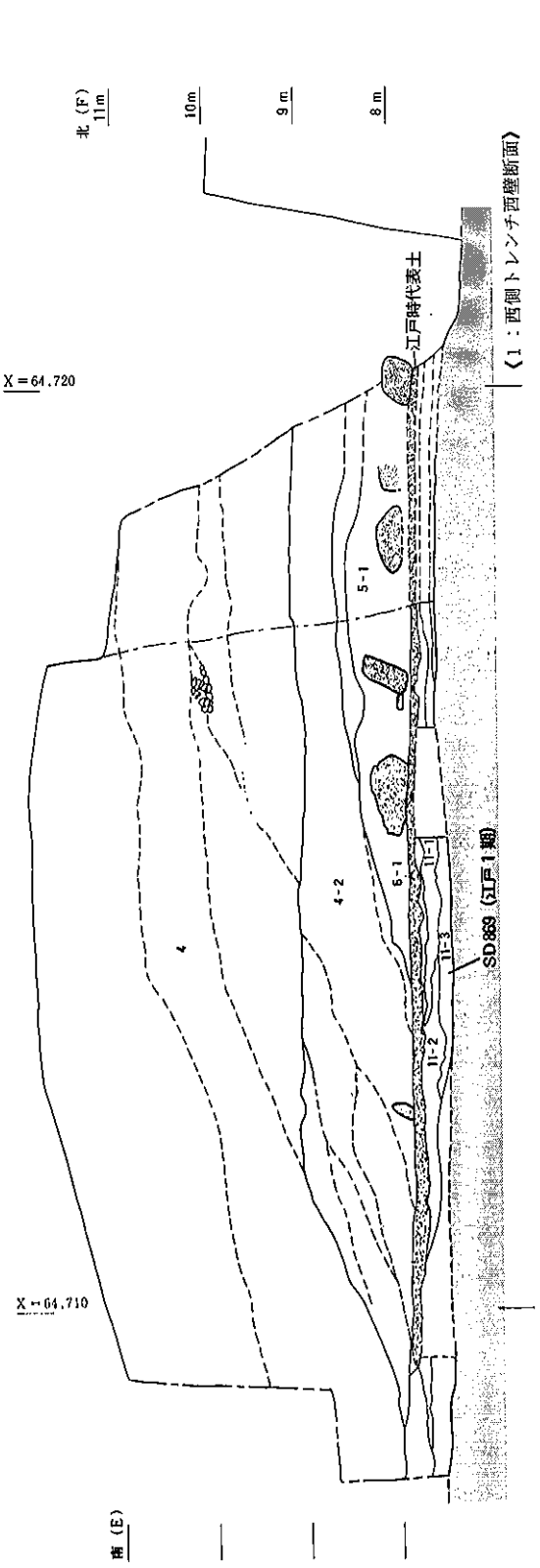
表土および福岡城土塁盛土出土遺物

59は擂鉢口縁部で破片である。鉄釉を口縁部外面に施釉。胎土は赤褐色で良く焼き締まっている。

60は肥前系染付皿である。口径13.8cm、器高3.9cm、高台径8.0cm、高台高0.4cm。内面には梅文を窓にあしらい、口縁部は鉄錆を施し赤褐色としている。

61は薄い透明釉を外面に施釉した土瓶である。左右に耳が付く。口径11.7cm。肩部には白釉を盛り上げて花文を描いている。

62は龍泉窯系青磁皿の口縁部破片である。口縁端部は強く外反し、刻目が等間隔で並ぶ。青緑色の厚みのある透明釉を施釉している。



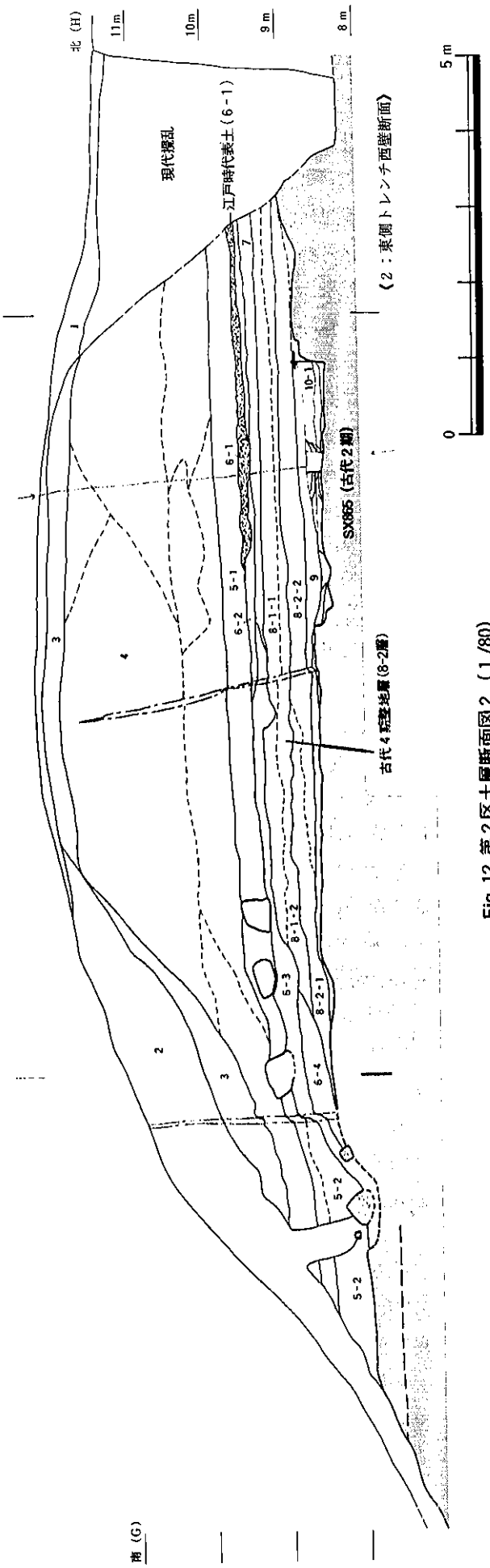


Fig.12 第２区土層断面図２（1/80）

63は定窯系蝶花皿の口縁部である。器壁の厚さは0.25～0.3mm。良質の精製された白色胎土上にわずかに青みを帯びる透明釉を施釉している。

64は白磁椀口縁部破片である。口縁部は小さな玉縁で、器面には透明度の高い透明釉を施釉している。

65は玉縁口縁を有する白磁椀の高台破片である。高台径6.0cm。高台高0.6cm。胎土は灰白色で黒色細粒を含む。内面および体部上半部に透明釉を施釉。釉調はやや不良。

66は龍泉窯系青磁椀である。高台径5.2cm、高台高0.8cm。胎土は灰白色で精良。全面に青緑色の透明釉を施釉している。外底見込に目跡を残す。

67は須恵器甕の胴部から頚部破片である。胴部最大径は9.6cm。良く焼き締まっており灰色を呈す。胴部には斜行する櫛目押圧文を施す。

68は肥前系青磁染付皿である。高台径は10.1cm。外面には青緑釉を施釉。内面には藤文をくすんだ呉須で施文している。高台は蛇の目高台で、高台外底には裏銘を加えている。武雄滝筒江窯の可能性がある。

69は国産の灰釉陶器椀である。口径14.8cm。胎土は須恵器質で良く焼き締まっており、明灰色。釉薬は薄く緑がかった半透明の灰釉である。

土塁盛土第5層出土遺物

70は越州窯系青磁椀。底部径6.8cm。胎土は精良で焼成良好。底部は蛇の目高台状にケズリ出している。内面から体部下端にかけて緑褐色の釉薬を施釉。内面見込と底部外縁に目跡を残す。

71は越州窯系青磁椀。底部径7.0cm。胎土はやや粗く、鉄分が吹きだしている。内面から体部下半にかけて緑褐色の釉薬を施釉。内面見込と底部外縁に目跡を残す。

73は北宋代の白磁椀高台破片。高台径6.3cm、高台高0.8cm。高台は断面三角形にケズリ出している。内面から体部下端に透明釉を薄く施釉。内面見込に界線を巡らす。

74は北宋代の白磁皿。底部径4.4cm。内底見込には蓮華文を陰刻している。薄く灰色を帯びた透明釉を全面に施釉、底部は掻き取っている。

81・82はいずれも三巴文軒丸瓦である。81は瓦当径14.1cm、外縁幅は2.3～2.5cm。82は瓦当径推定14.2cm、外縁幅2.2cm前後。巴は、81は左回転で、82は右回転である。いずれも尾はやや長めである。81の珠文は等間隔に15個配されているが、82はやや不均等に平坦な珠文が8個配されている。

83は、均整唐草文を配した軒平瓦である。肉太の中心飾から左右に3回反転する唐草は接しておらず、それぞれ子葉を有している。上外区には珠文を配している。顎部は曲線を描く。焼成はやや甘く、軟質で脆い。灰白色を呈する。

84は鴻臚館式軒丸瓦瓦当部破片である。瓦当径は推定16.4cm。中房は弁区と比べ盛り上がっている。磨耗しており蓮子数は不明。弁区には反りの強い複弁八弁を配している。丸瓦は弁区の裏位置に接合している。胎土は細砂を含むややきめの粗い泥質土を用い、黒灰色に焼成している。

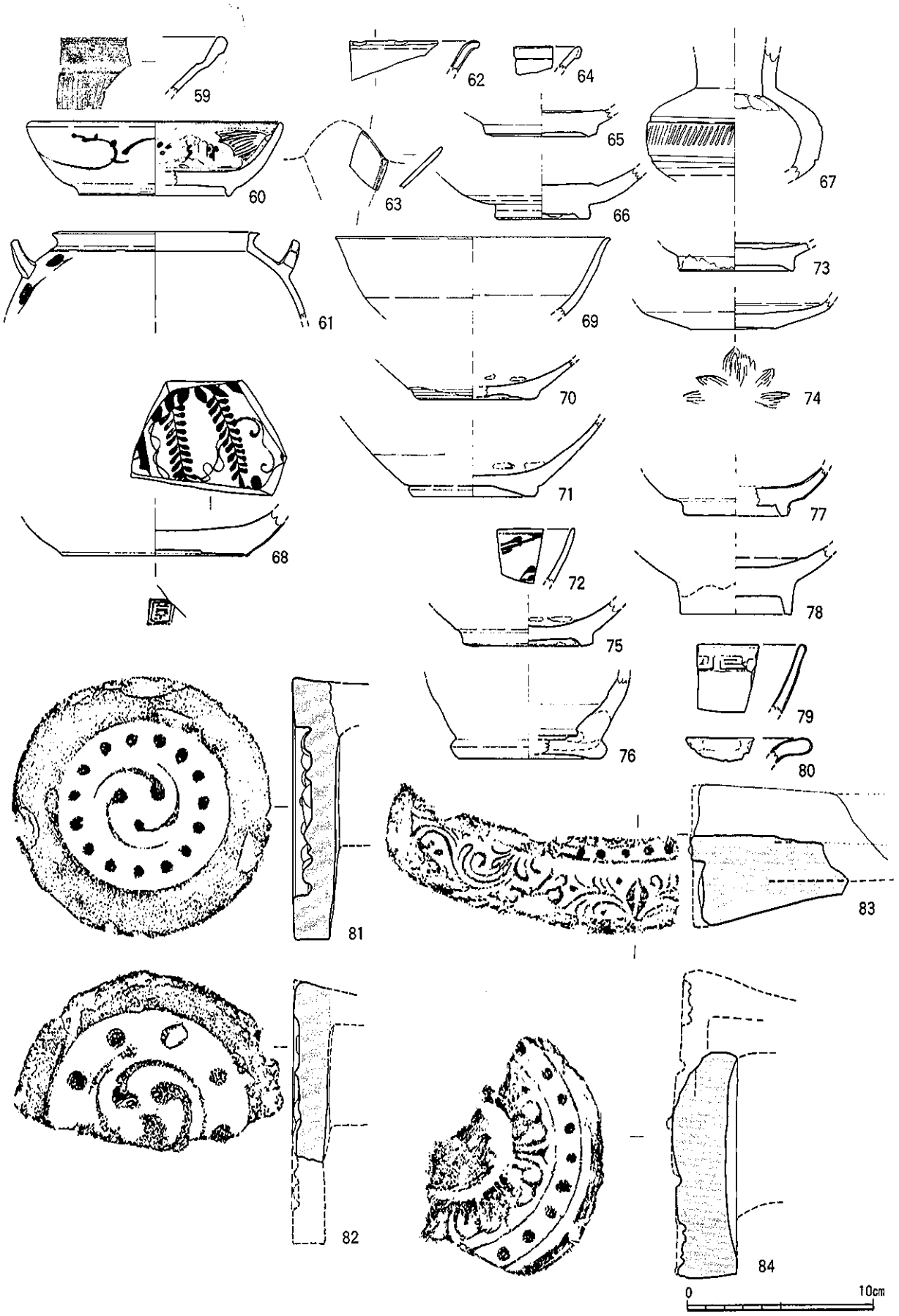
第6層出土遺物

72は染付椀口縁部破片。胎土上に白色に化粧土を施し呉須で施文している。呉須は滲み、絵柄は不鮮明である。

76は越州窯系青磁壷底部破片である。底部径8.3cm。胎土は粗く、黒色の鉄分の吹き出しが見られる。底部は円盤状の上げ底である。釉薬は体部上半部に施釉されている。

溝SD869・礫群SX870・地山面SX895

調査区西側に位置する。溝SD869西壁上端は土塁盛土直下で、標高10.2mを測る。土塁盛土の堆積



Fig,13 第２区出土遺物実測図１（1/3）

状況からみると、本来の上端はもう少し高かったことが推定される。一方、東壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は片薬研的で非対称である。溝内には一抱え以上の礫石が投げ込まれた状態で埋没している。江戸期の表土層第6層がこれらの下部に潜り込んでいることから、土塁構築時に投棄されたものと考えられる。

礫群SX870の石材は玄武岩・花崗岩・礫岩・砂岩がある。これらの礫石には礎石建物SB31やSB32で用いられた礎石や基壇縁石と形状や大きさが似るものもある。当該地点近くの鴻臚館関係の建物礎石だった可能性がある。また溝SD869の西壁には石の据え付け穴があること、礫群が西壁側から突き落とされたような分布状況を示していることから、土塁構築以前に、溝SD869西壁に沿って石垣状の石組みを伴う何らかの施設が一段高くなっている地山面SX895にあった可能性が考えられる。溝SD869最下部からは古代の瓦・越州窯系青磁片・龍泉窯系青磁椀などが出土。溝SD869掘削の時期は江戸時代初期以降と考えられる。

溝SD869出土遺物

75は越州窯系青磁椀である。高台径7.0cm。高台高0.7cm。オリーブ色の半透明釉を全面に施釉。畳付部は掻き取っている。目跡が内底および高台畳付部に残る。

77は龍泉窯系青磁椀高台破片である。高台径5.8cm、高台高0.8cm。胎土精良。全面に明青緑色の半透明釉を厚く施釉。内底見込は輪状に掻き取っている。

78は北宋代の白磁椀である。高台径6.0cm、高台高1.7cm。高台上端まで灰色がかった透明釉を施釉。内底見込には界線が巡る。胎土は灰白色で空隙がやや目立つ。

段落ちSX881

東側トレンチの土塁盛土第5層下面～第6層上面で検出した。北から南へ向かって一段下がる段落ちである。比高差は約20cmで比較的明瞭に段差が認められたが、西側トレンチでは認められていないので、部分的な微地形の可能性もある。

石列SX867・SX868

東側トレンチ南端で第5－2層中位～下面で検出した。両者はほぼ平行している。幅は約0.85cm、上端の高さはほぼ等しく、標高8.3m前後を測る。地山を若干掘り下げ、平坦部を造りだした後に段部上端と下端平坦面に人頭大のやや扁平な礫石(玄武岩・砂岩)を立てて東西方向に並べている。SX867はやや小振りである。盛土の堆積状況からみて、土塁南面下端部の排水用溝の可能性がある。なお、この石列の東延長線は、平成元～2年度の南門推定地点の調査で確認された土塁崩落後に築かれた土留め用石垣の東西線上に合致している。

中世の遺構

溝SD873

調査区のほぼ中央に位置する。第6-1層の下面で検出した。埋土は暗灰褐色混砂粘質土である。幅は0.56～0.68m、深さは10～15cmである。断面形は浅皿状。ほぼ南北に延びている。古代瓦片、越州窯系青磁細片が若干出土している。

溝SD892

調査区西側トレンチ第6-1・6-2層下部で検出した。埋土は灰褐色粘質土。幅は約0.4m、深さ0.1m前後を測る。やや西に偏しながら南北に延びている。南へ向かって底面は低くなっている。SD873との先後関係は不明。古代瓦小片、白磁細片が出土。

地下式横穴SX863　前節で述べたので省略する(17頁)。

第7層出土遺物

79は龍泉窯系青磁椀口縁部破片である。口縁部直下に雷文をヘラ描きしている。全面に深い緑色を帯びた透明釉を厚く施釉している。

80は龍泉窯系青磁皿口縁部破片である。口縁端部は強く外反する。胎土および釉調は26とほぼ同質である。

第8-1層出土遺物

85は白釉磁器椀。口径10cm、器高4.0cm程か。胎土はうすく褐色を帯びた白色で空隙が点在する。体部下半はヘラケズリによる成形。光沢のある白色釉を内面から体部下半にかけて施釉している。

86は北宋代の白磁椀。幅広く薄い玉縁をなす。胎土は明灰白色で、全面に透明度の高い透明釉を施釉。

古代の遺構

第8-2層出土遺物

90は白磁椀口縁部破片である。玉縁は細く、やや平たい。良質の透明釉を全面に施釉している。

92は白磁椀高台部破片である。高台径8cm、高台高0.4cm。内面見込には界線を巡らしている。薄く青みを帯びた良質の透明釉を施釉。

91･93･94は越州窯系青磁椀高台部破片である。

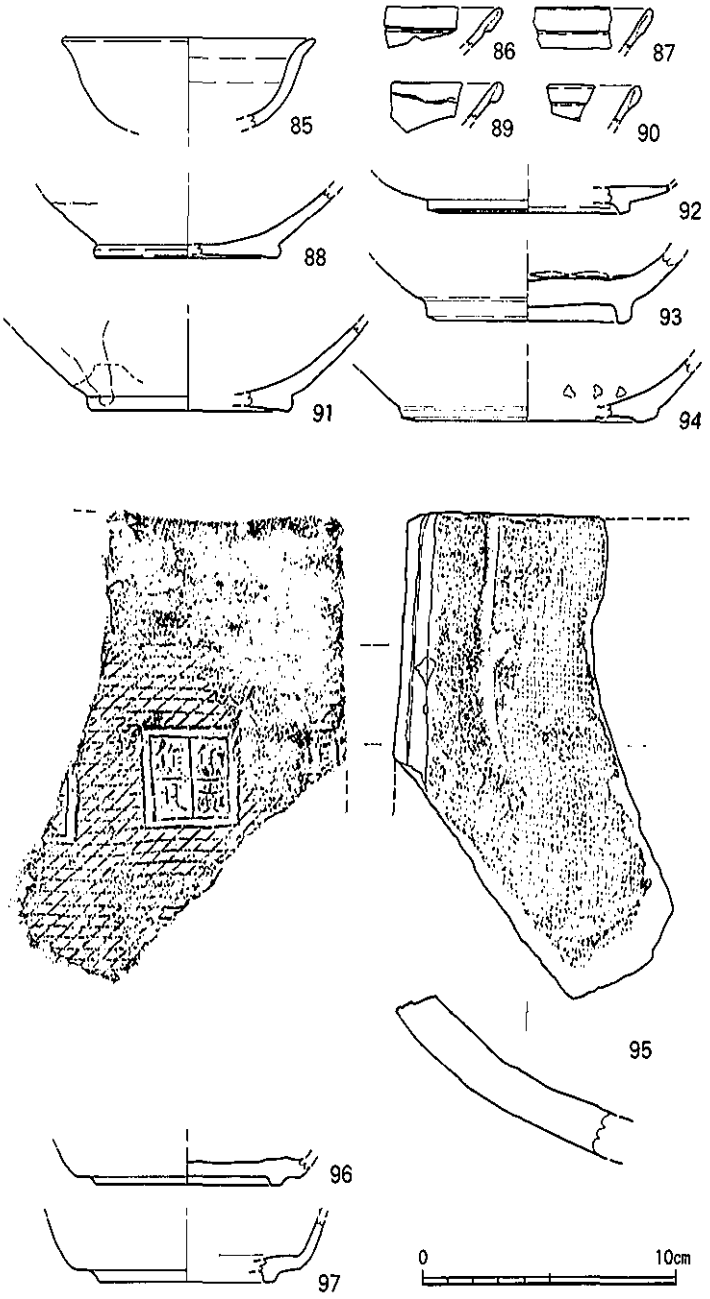
91は底部径8.1cm。底部高0.6cm。底部は上げ底である。胎土はやや粗い。オリーブ色の不透明釉を内面から体部外面下半に施釉している。

93は高台径8.1cm、高台高0.8cm。全面に薄く黄褐色がかった緑色透明釉を施釉。内底見込と高台畳付に目跡を残す。

94は高台径10cm、高台高0.5cm。オリーブ色の不透明釉を全面施釉している。低くケズリ出された高台畳付と内面見込には目跡を残す。

溝SD864

調査区中央に位置する。第8-2-4層下部で検出された。埋土は褐色粘質土。断面観察による遺構の先後関係は、SX865 → SP887 → SP889 → SD866 → SD864 → SD873の順で新しくなる。南北に延びる



Fig,14　第２区出土遺物実測図２(1/3)

溝で、幅1.8～1.9m、深さ0.25～0.32mを測る。断面形は浅皿状である。

95は平瓦である。布目および格子目叩き跡を残し、「伊貴作瓦」を刻印している。焼成は良く堅く焼き締まっており、わずかに青みを帯びた灰色を呈する。

SD864を覆う第8-2-2層出土遺物

88は越州窯系青磁椀。底部径7.4cm。胎土は灰色でややきめ粗い。底部は円盤状でやや上げ底である。オリーブ色の半透明釉が内面から体部下半にかかる。底部外縁に目跡を残す。

87・89は北宋代の白磁椀口縁部破片である。幅広く薄い玉縁をなす。胎土は白色で精良。透明釉を全面に施釉している。いずれも透明度が高く良質である。

溝SD866　前節で述べたので省略する(17頁)。

溝SD884

調査区西側で検出した。東側壁がわずかに遺存している。土層断面でかろうじて溝状になることがわかる程度である。中世の溝SD892とはほぼ重複しているが、方向性がやや東に偏している。SD864とはほぼ平行している。北側延長線上は、SB31の雨落ち溝に一致しており、礎石建物SB31の南延長部でのあり方を考える上で重要な遺構である。

布掘状遺構SX865

７年度調査で確認されたSX865の北壁の西側延長部を掘り下げ、溝SD864に接する位置で北壁と直交する西壁を確認した。壁は、壁と埋土(明褐色粘質土　第10層)間で明確に区分でき、埋土はめくれるように剝がれた。壁の高さは最も残りの良いところで0.45mを測る。本来の高さ(掘削深度)は、北壁に残る地山の高さからみて約0.7mはあったと思われる。壁は直立し、壁面は鋤先状のやや丸みのある掘削痕が所々残っており、遺存状況は良好である。南壁については未確認であるが、東側トレンチ西壁の断面観察では、北壁から南へ約3.4mの位置に地山がわずかに立ち上がる箇所があり(Fig.12-2)、南壁の可能性が考えられる。東西壁の方位はN-92°-Eで、鴻臚館跡遺構Ｂ・Ｃ群の方向性に一致している点は注意される。出土遺物からみて、時期的にはＢ群の一部をなす遺構と判断される。

SX865埋土出土遺物

96・97は須恵器杯身高台破片である。高台径・高台高は96が7.4cm・0.3cm、97が7cm・0.4cmを測る。97がやや大きい。いずれも胎土は精良で、細かな石英砂粒をわずかに含む。高台は体部下端からやや離れて位置している。97には体部下半に自然釉が薄くかかる。奈良時代前半期のものである。

(4)小結

以上の調査結果を各区別にまとめると以下のようになる。

第１区では、盛土造成時期は、頁岩風化土盛土上面まで掘り下げた結果、盛土上部は江戸期造成の可能性が高いと判断された。周辺のボーリング調査結果では、標高５mの地山の地形変換点から北側に土質の異なった盛土層の存在が指摘されている。この地形変換点は鴻臚館跡復原範囲の北辺にあたっており、将来の調査ではこの面の精査が必要と思われる。

第２区では、礎石建物SB31の南側延長線上に、建物の一部と思われる礎石列等の遺構は確認できなかった。

布掘状遺構SX865の掘削時期は８世紀前半以降に掘削されたもので、鴻臚館跡遺構Ｂ群の一部をなす遺構であると判断された。

第3章　結　語

平成５年度から６年度の福岡城跡三の丸西郭(通称舞鶴公園西広場)および潮見櫓跡周辺の発掘調査とボーリング調査によって、三の丸西郭北側一帯は、築城にあたって大がかりな盛土造成を行ったことが確かめられた。調査では、草ヶ江と呼ばれた入江の東沿岸部の干潟を埋め立てたことと、少なくとも江戸時代初頭の汀線は御鷹屋敷が立地する高台の下までせまっていた可能性が指摘できた。また、江戸期の屋敷地・土塁・櫓台などは標高4.7mのレベルを基準面として建造・構築されていることが判明した。

さらに、三の丸北縁部にあたる陸上競技場北半部～平和台野球場北半部の広い範囲には１～５m以上の盛土が地山上に分布していることが明らかとなり、鴻臚館跡の復元にあたっては、個々の建物復元と併せて、福岡城築城以前の旧地形の復元が必須の課題になった。

平成７年度・８年度の調査はこれらの所見を踏まえて、第１区では盛土造成の上限時期の推定、第２区では鴻臚館跡南限域の復元を主目的として発掘調査を実施した。

各区毎に調査結果と問題点をまとめると以下のようになる。

１．第１区

平和台野球場北西部に位置する当該区では、標高7.3～7.5mの面で江戸時代後期から末期および近現代の遺構と遺物を検出した。鴻臚館跡に関する遺構は見出せなかったが、第９層から若干の古代瓦や北宋代の白磁破片が出土した。

江戸時代の遺構がのる第９層下部(標高6.1m前後)には第三紀風化頁岩・粘質土を主体とする盛土がに厚く堆積している(Fig.16中b_1層)。平成６～７年度のボーリング調査によると、当該地点では厚さは約５mを測り、上下２層に分層できる可能性がある。この盛土上部層と第９層は、江戸期から近代初頭のものであるが、盛土下部層については造成時期は不明である。

第Ⅰ期調査区である野球場外周南側では、奈良時代から平安時代の布掘遺構・礎石建物跡および江戸時代の建物跡が、残りが良いところで標高9.1～9.3mの面で検出されている。したがって、直線距離にして約150m離れた地点間での遺構検出面の比高差は、現状で1.5～1.6mほどであり、遺存状況から復元した本来の比高差は1.0～1.2mである。この比高差は、城内の古絵図を参考にすると、大音家の屋敷地地盤が、北側に対峙していた浦上家等の大身屋敷地より一段高かったことによるものと考えられる。高まりの範囲は、北限が二の丸表御門付近(野球場スコアボード北側付近)、南限が南側土塁付近までで、この範囲は鴻臚館跡遺構Ｂ群の塀(布掘遺構SA15)周辺から以南の範囲にほぼ相当し、地山面を基盤としている範囲であることは注意される。

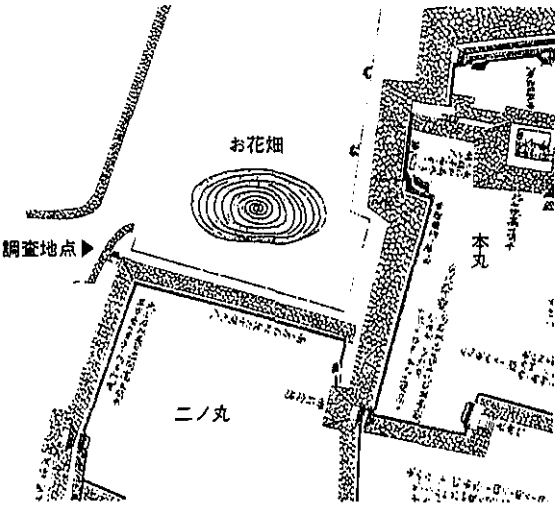
盛土によって平坦面を造りだしたのは、福岡城築城時の三の丸北縁(平和台野球場の中央から北側)が、築城当時、海に面して低く傾斜していた地形であったことによると考えられる。鴻臚館跡推定範囲の北側に関連遺構が存在するとすれば、上部盛土下面または下部盛土層の下面に包含されている可能性が高い。したがって、上下２層に分層可能と思われる盛土層(b_1層)の造成上限時期の検討は、鴻臚館造営時期の景観復元も含めて、今後の調査の課題のひとつである。

２．第２区

鴻臚館跡推定範囲の南縁域にあたる本調査地点は、江戸期を通じて存在した土塁によって各時期の遺構の層位的所見を得ることができた。検出した遺構を時期別に分けるとFig.3のようになる。ここでは時期別に調査所見と問題点をまとめる。

江戸時代～近代

調査区西側で確認された、一段高い地山面SX895およびその下の溝SD869内の西側に投棄された礫石群SX870は、元禄12年(1699)の『御城内絵図』および金子堅太郎「黒田如水伝」(大正5年刊)収録の城内図中のお花畑に通じる門(水の手門)の東側石垣の一部および石垣に用いられた石材の可能性が高く、土塁構築の際に投棄されたと思われる。したがって、第2区部分の現土塁は、大正期以降の新しい築造のもので、24連隊の弾薬庫建設に伴って行われた土塁再整備時の可能性が高いと考えられる。ただし南縁土塁全体の構築時期の上限については、今後の調査の結果を待って検討したい。



Fig,15 福岡城内之図中のSX895推定位置

石列SX868・SX867は、平成2年度調査の南門推定地南側で検出した土留用石垣の西側延長部にあたる。17～18世紀代にかけて土塁の補修等が数次にわたって部分的に行われたことが考えられる。

中世後期

この時期の遺構は、整地土第8-1層、溝SD873、地下式横穴SX863がある。これまでの調査で、貞和六年銘のある板碑の表採例や、銅鐘鋳型および溶鉱炉を伴う工房跡、溝、地下式横穴・五輪塔が検出されており、当該地の一画が墓地として利用されたことが考えられる。数量的には少ないが、13～15世紀代の龍泉窯系青磁は供献されたものの一部であろう。

古代4期

この時期の遺構は第8-2層、溝SD884・SD866がある。

第8-2層は溝SD884・SD866等の古代の遺構を覆う整地層で、五代～北宋の遺物を含み、その上限は10世紀後半以降と考える。これまでの調査で確認されたこの層の広がりや大量の中国産遺物を含む廃棄用土壙の分布から見て、鴻臚館跡の造成が広い範囲で行われたと考えられる。下限については、10世紀後半から11世紀代の遺物を含む昭和62年度調査土壙SK01・平成元年度調査土壙SK208等が掘削される時期と考えられる。したがってこれ以降の鴻臚館跡関連遺構の有無の確認と鴻臚館廃絶の時期の検討が課題として残る。

Tab, 3　平成7・8年度検出遺構編年表

今回の調査		これまでの成果		
時期	検出遺構	≪推定上限≫	時期区分	主要遺構
江戸2期	土塁、石列SX868	17世紀後半～18世紀以降		土留用石垣
江戸1期	石列SX867、溝SD869および礫群SX870の一部、SP874	17世紀半ば以降		掘立柱建物・塀
中世後期	第8-1層、溝SD873、地下式横穴SX863	15世紀以降		銅鐘鋳型・炉
――	――――	11世紀代	鴻臚館跡D群	土壙群
古代4期	第8-2層 SD884 SD866	10世紀半ば以降		土壙群
古代3期	溝SD864、	9世紀半ば以降	鴻臚館跡C群	礎石建物・土壙群
古代2期	段落ちSX865、	8世紀前半以降	鴻臚館跡B群	東門・塀・トイレ遺構
古代1期	柱跡SP878～886	不明(7世紀末か)	鴻臚館跡A群	掘立柱建物

SD884は礎石建物SB31西側雨落ち溝の延長部にあたり、排水用の溝と考えられる。

SD866は礎石建物SB31東側礎石列の延長部にあたる。これも排水用の溝と考えられる。

SD884とSD866の先後関係は不明であるが、同一時期に平行して存在していたと仮定すると、その間の帯状の高まりが注意されるが、この部分については未掘のためその性格は不明である。

古代3期

Fig,10中の＋印の地点は礎石建物SB31の礎石据付穴の推定位置であるが、これまで確認された礎石据付穴とほぼ同じレベル(標高9.1～9.2m)の地山面であるにもかかわらず、当該地点では据付穴の痕跡は確認できなかった。したがってSB31は第2区までは延びない可能性が高い。

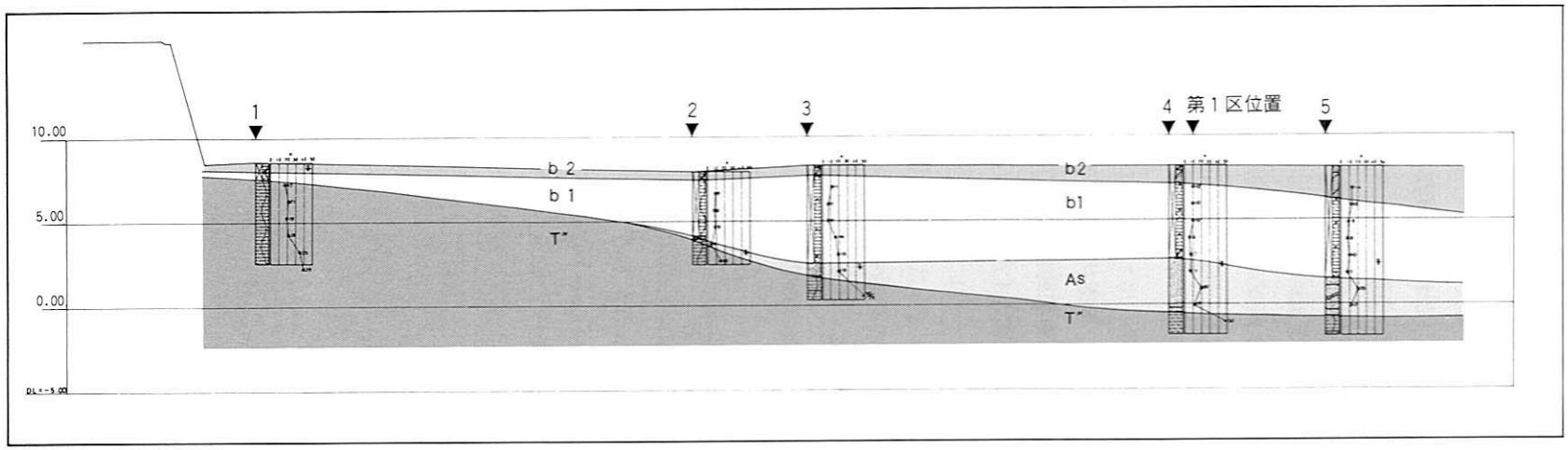
なお、SB31の南限位置については、回廊SB50の礎石北列と平行し南門推定地の礎石据付穴を通る東西線と、SB31礎石西列の南側延長線との交点位置よりも北側の地点が考えられる。ただしその位置は第2区北壁にかかる位置であるが、昭和20年代の土取りによって消滅している。

古代2期

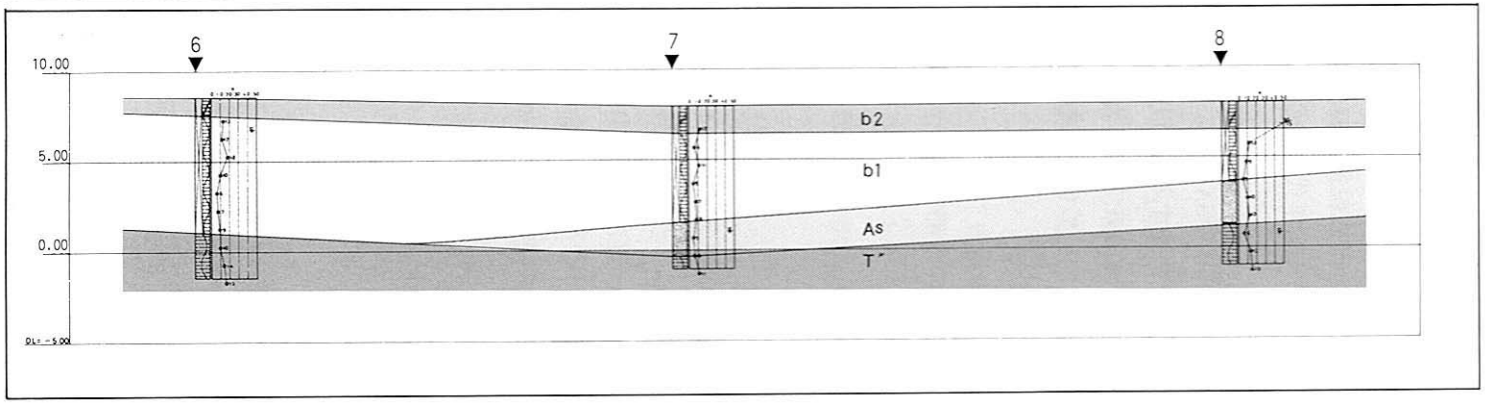
この時期に造成されたと考えられる布掘状のSX865は、北壁の東西方向がN-92°-Eで、B群およびC群の方向と一致すること、B群の遺構と共通する掘削方法(壁を直立させ、布掘状に掘り下げる)を用いていること、8世紀前半代の須恵器・瓦片を含むことの3点によって鴻臚館跡遺構B群に関連する可能性がある。このSX865の性格づけについては、南縁土塁部分の今後の調査を待って検討してゆきたい。

古代1期

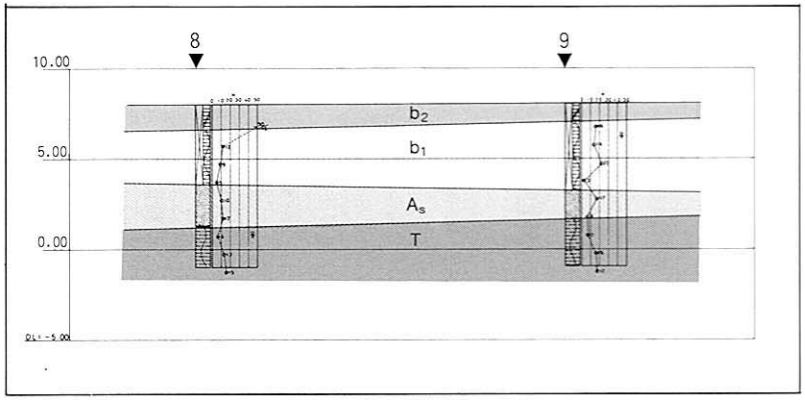
当該期の遺構には、SX865およびSD866の下部で検出された柱穴がある。これらの時期については不明である。



地層想定断面図
A－B断面図

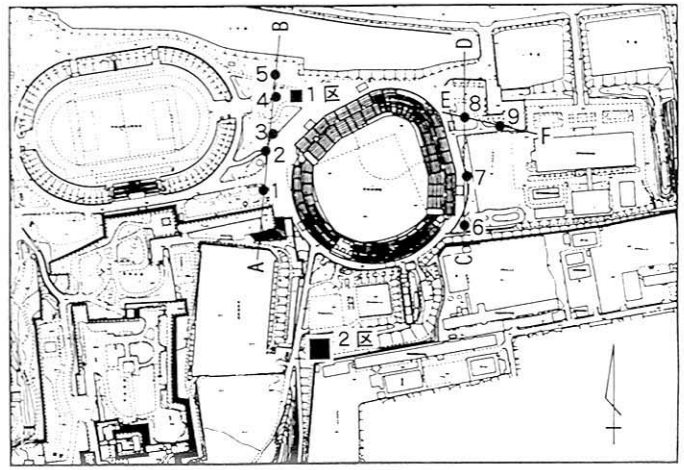


地層想定断面図
C－D断面図



地層想定断面図
E－F断面図

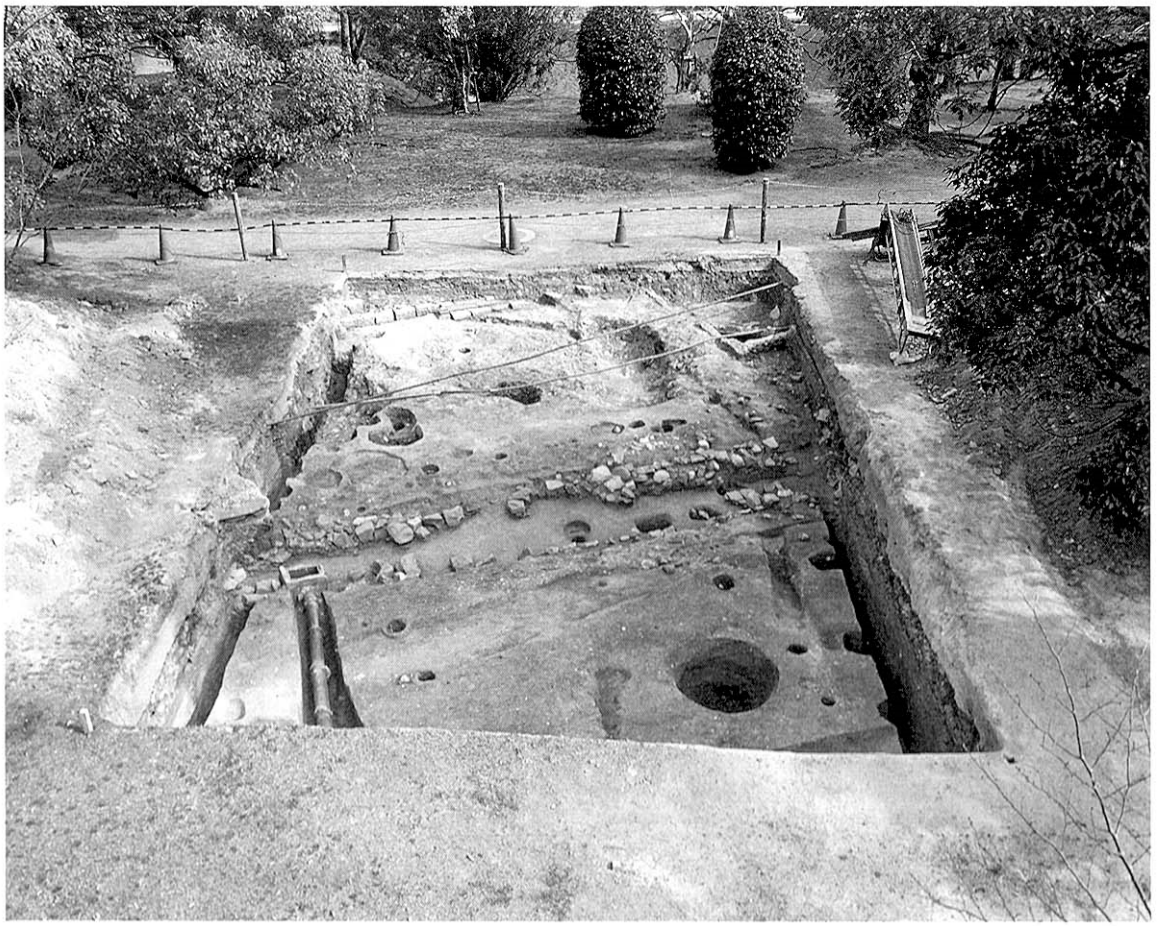
凡　例	
b2	表土層
b1	埋土層
As	沖積黄褐色砂質土層
T	風化岩層



Fig,16 球場周辺土層断面想定図

図　　版

(PLATES)



（1）第31・35次調査第1区全景（南から）



（2）溝SD12・33検出状況（西から）



（3）調査区北東部土壙および柱穴検出状況（南から）



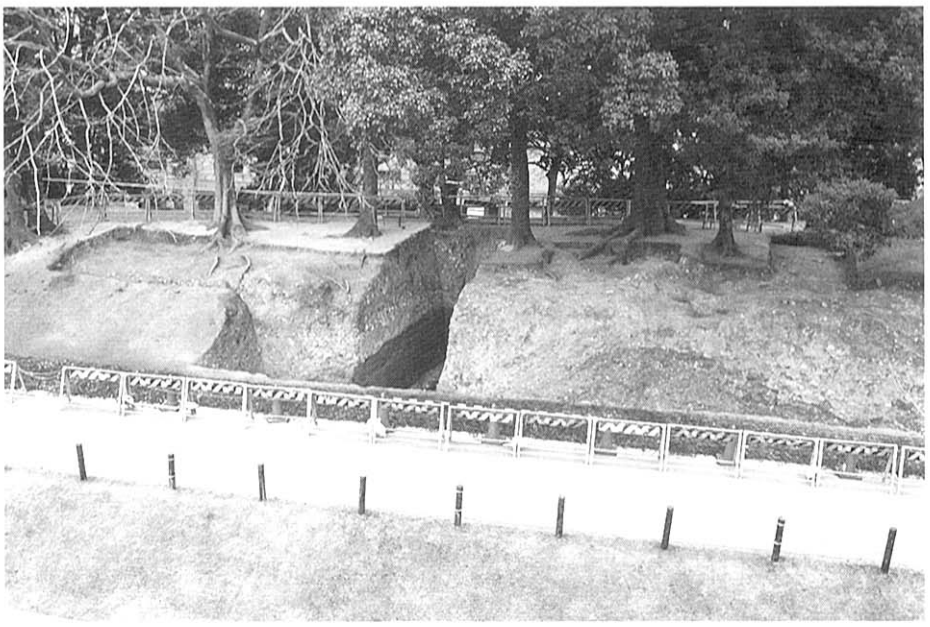
（4）第1区作業風景（北西から・平成7年度）



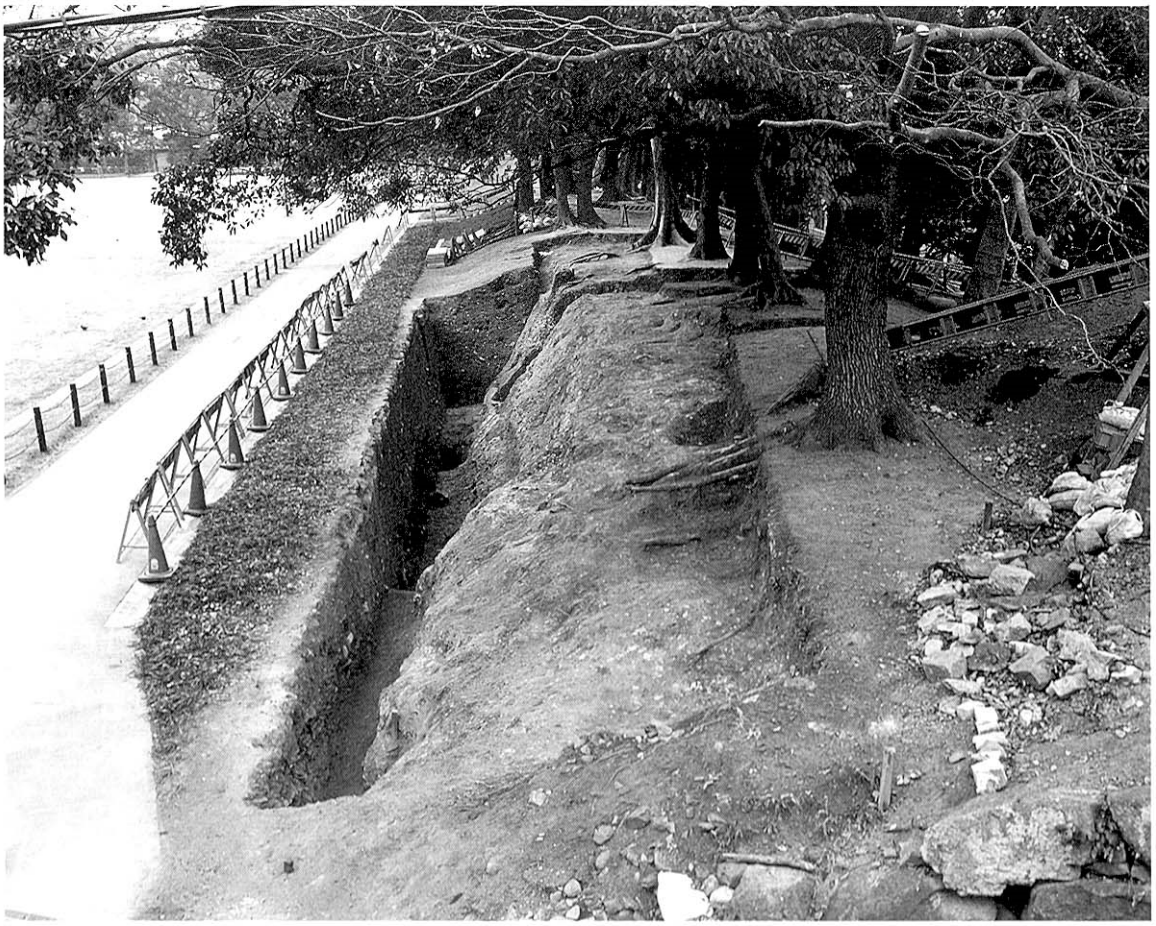
（1）第31・35次調査第２区
調査前現況（東から）



（2）第31・35次調査第２区
調査前現況（西から）



（3）第31次調査第２区
トレンチ掘り下げ状況（北から）



（1）第31次調査第２区掘り下げ状況（西から）



（2）第31次調査第２区掘り下げ状況（東から）



（1）第31次調査第２区東トレンチ掘り下げ作業風景(南から)



（2）第31次調査第２区東トレンチ掘り下げ状況(東から)



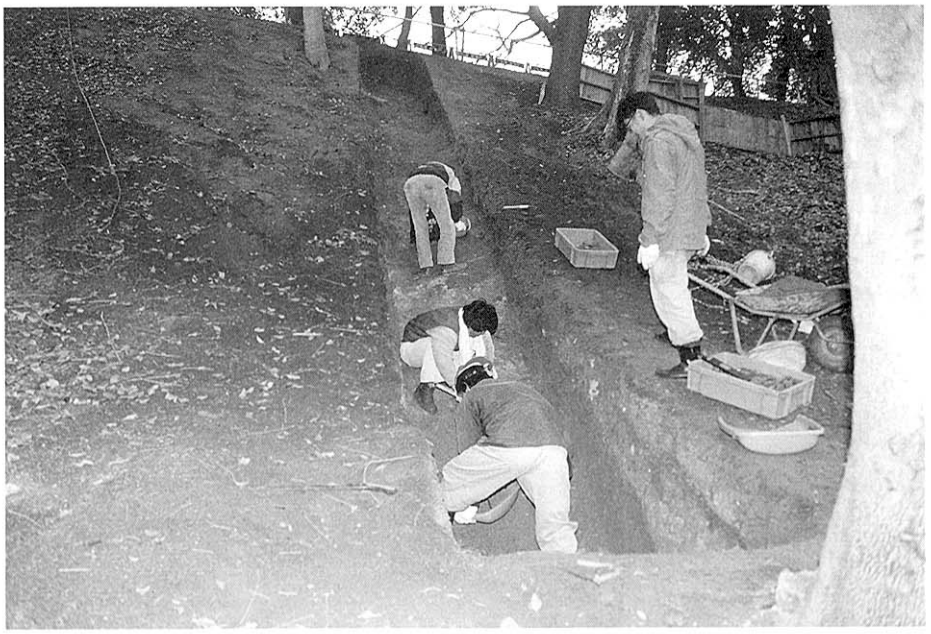
（3）第31次調査第２区東トレンチ掘り下げ状況(北から)



（1）第31次調査第２区東トレンチ布掘状遺構SX865検出状況（南から）



（2）第31次調査第２区東トレンチ布掘状遺構SX865検出状況（東から）



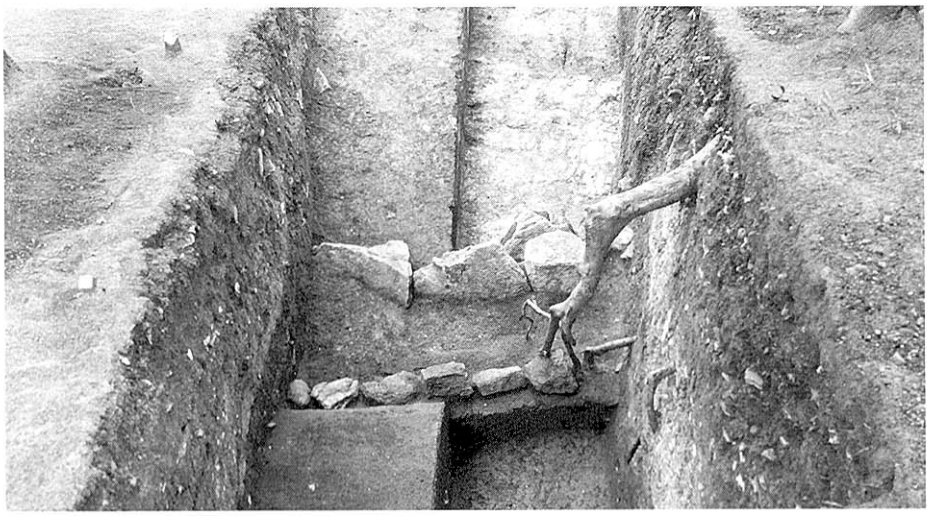
（1）第31次調査第2区土塁南面トレンチ掘り下げ作業風景（南から）



（2）第31次調査第2区土塁南面トレンチ掘り下げ作業風景（東から）



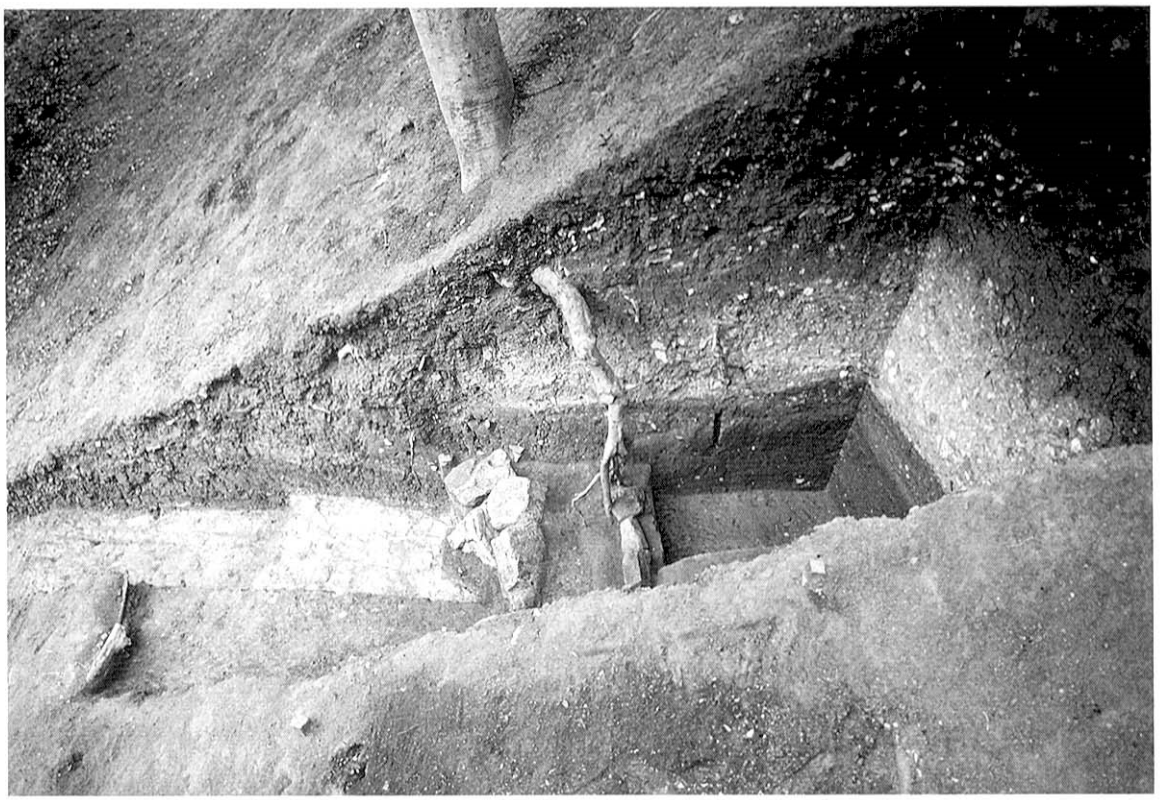
（3）第31次調査第2区土塁南面トレンチ全景（南東から）



（1）第31次調査第２区土塁
南面トレンチ検出石列
SX867・868検出状況（北から）



（2）第31次調査第２区土塁南面トレンチ検出
石列SX867・868検出作業風景（北から）



（3）第31次調査第２区土塁南面トレンチ検出石列SX867・868検出状況（東から）



（1）第35次調査第２区土塁盛土除去状況（北東から）



（2）第35次調査第２区土塁基底面
（第６層上面）検出状況（北から）



（1）第35次調査第２区土層盛土除去作業風景（北東から）



（2）第35次調査第２区第８層掘り下げ作業風景（東から）



（１）第35次調査第２区溝SD864、布掘状土壙SX865検出状況（北東から）



（２）第35次調査第２区中央部東西土層断面（北から）



（３）第35次調査第２区溝SD864検出状況（東から）



（４）第35次調査第２区溝SD869内の礫群SX870出土状況（東から）



（５）第35次調査第２区溝SD869内の礫群SX870出土状況（北から）



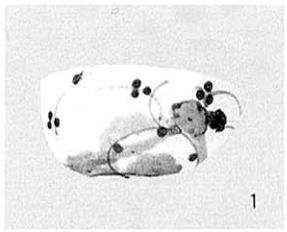
（1） 第35次調査溝SD864、布掘状遺構SX865検出状況（東から）

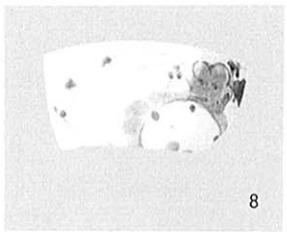


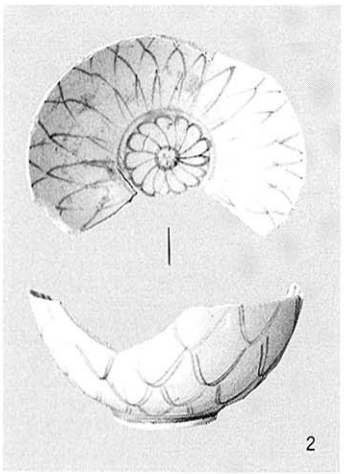
（2） 布掘状遺構SX865検出状況（東から）

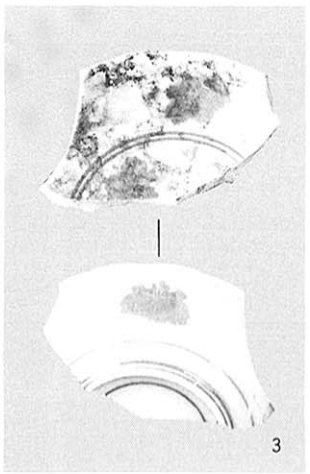


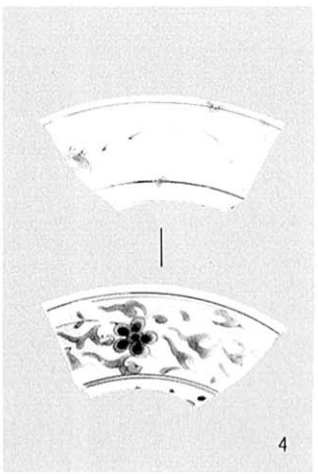
（3） 布掘状遺構SX865検出状況（南東から）

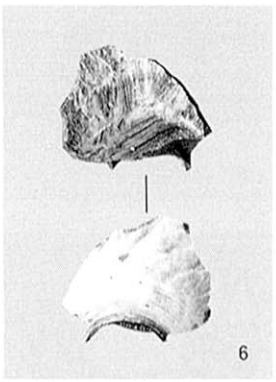

1

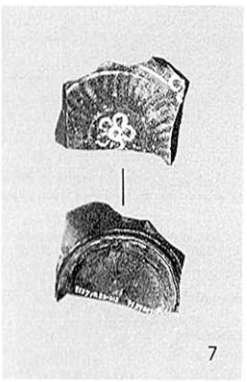

8

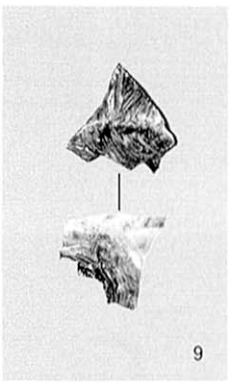

2


3

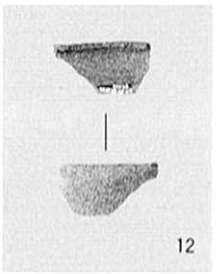

4

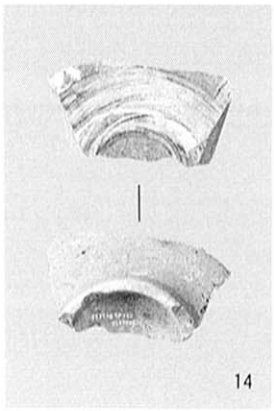

6

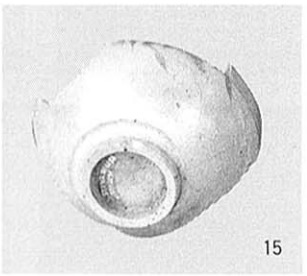

7

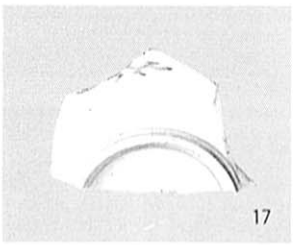

9

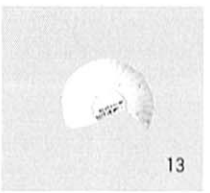

11

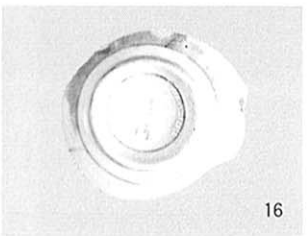

12

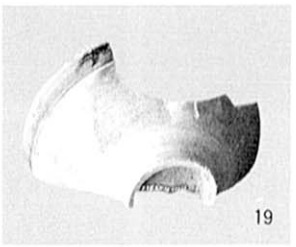

14

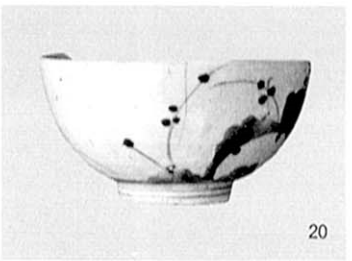

15

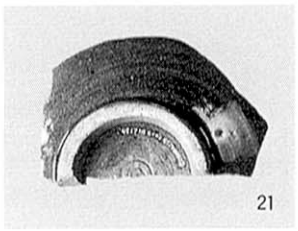

17

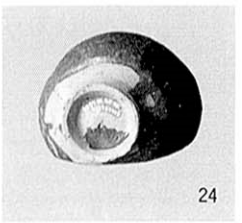

13

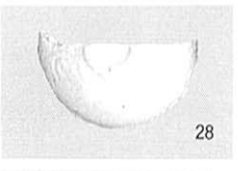

16


19


20

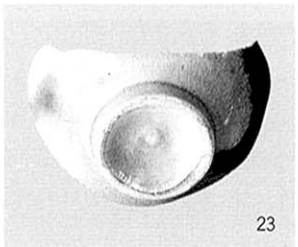

21

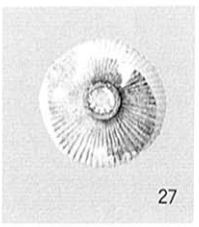

24

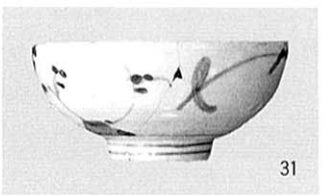

28

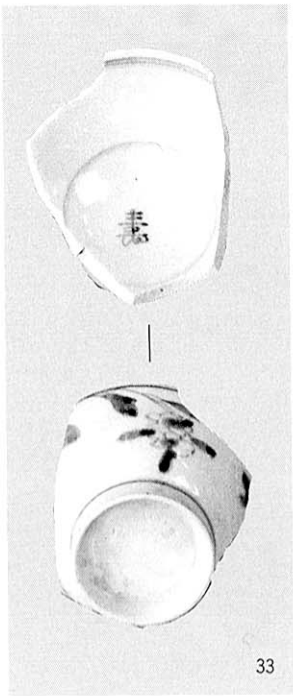

29

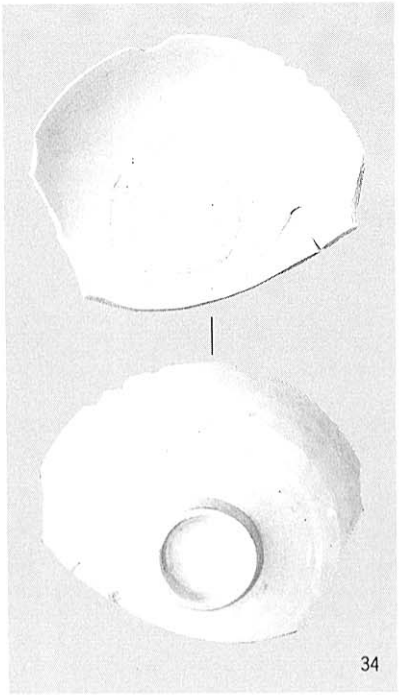

32

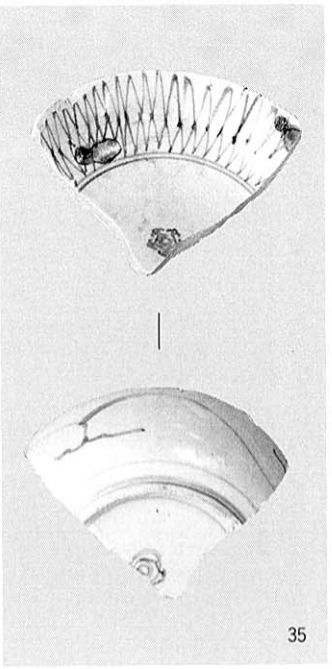

23

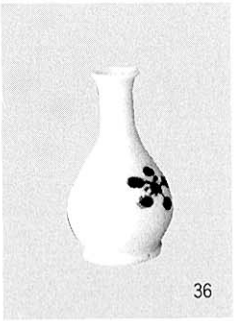

27

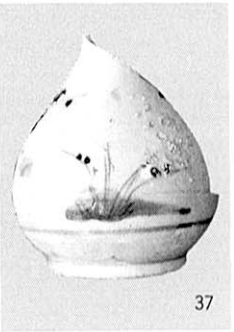

31

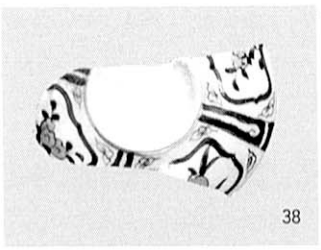

33

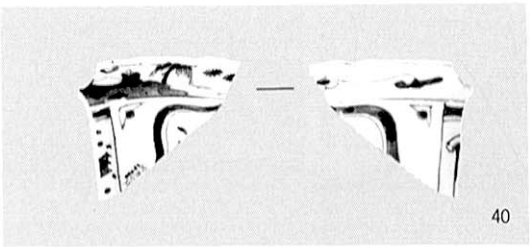

34

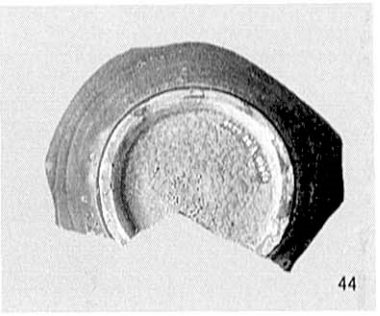

35

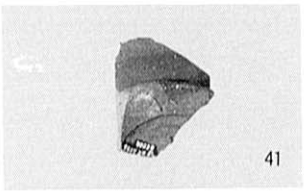

36

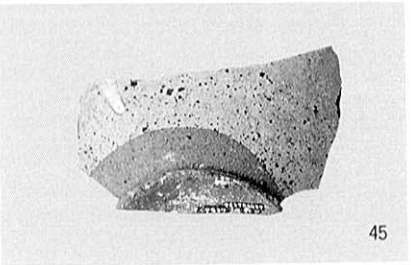

37

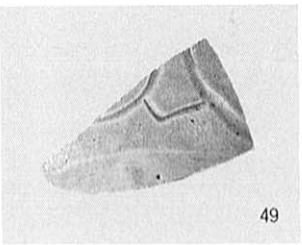

38

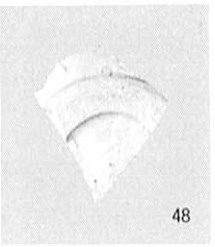

40

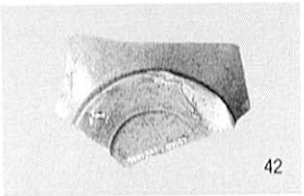

44

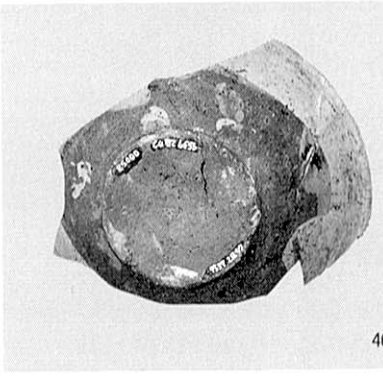

41

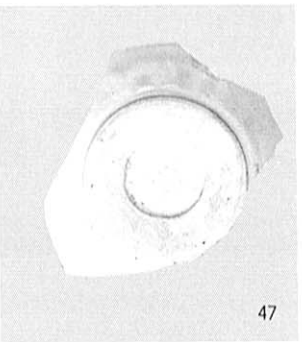

45

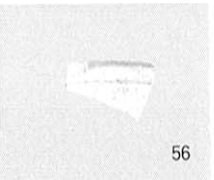

49

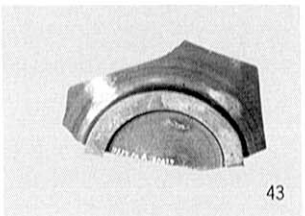

48

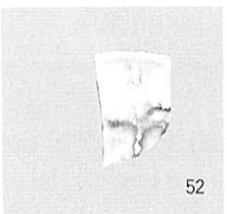

42

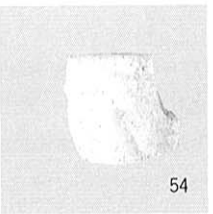

46

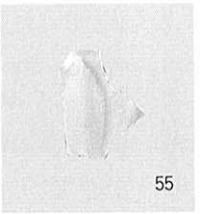

47

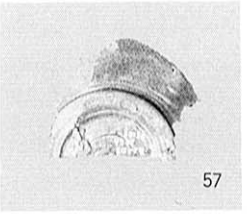

56

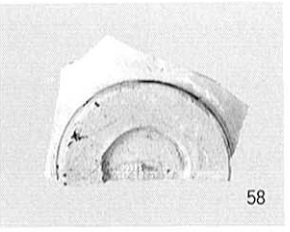

43

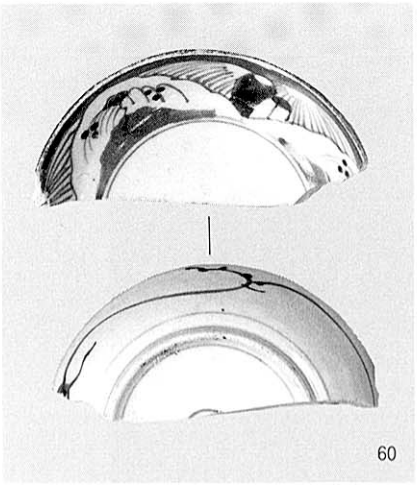

52

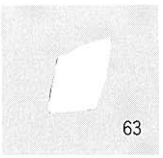

54

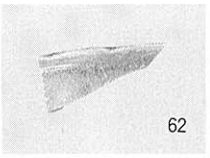

55

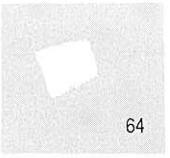

57

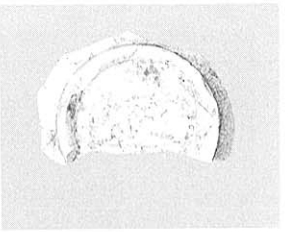

58

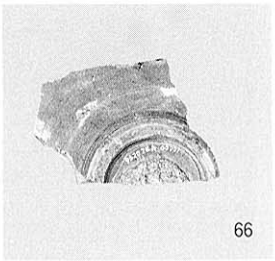

60

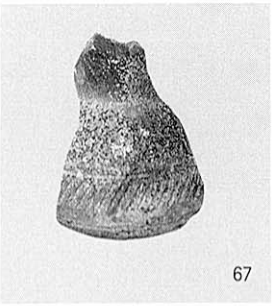

63

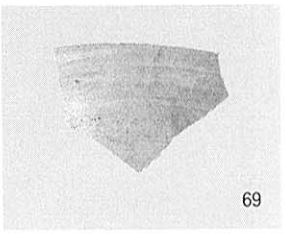

62

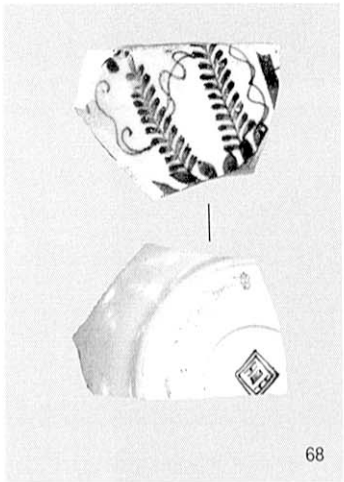

64

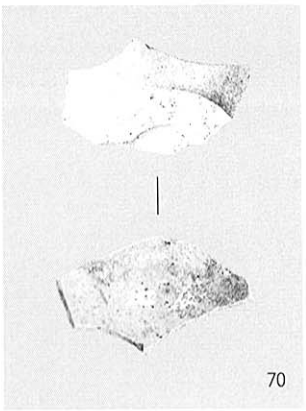


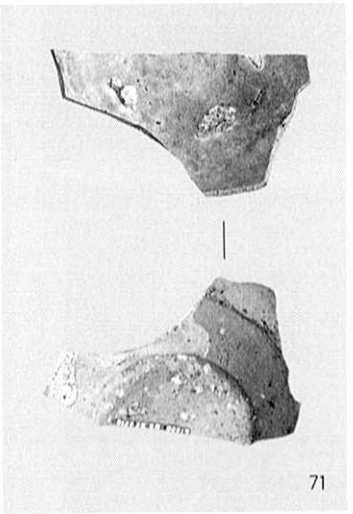

66

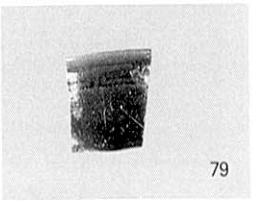

67

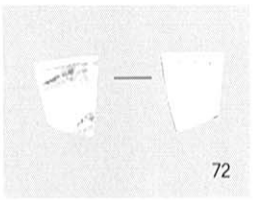

69

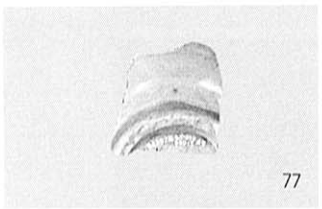

68

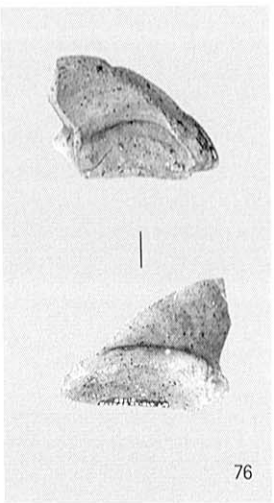

70

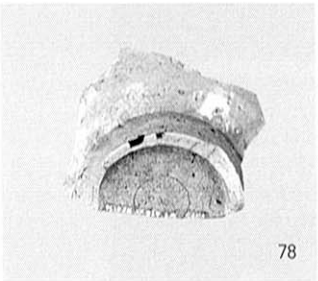

71

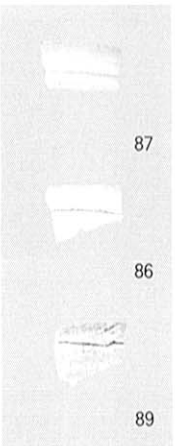

79

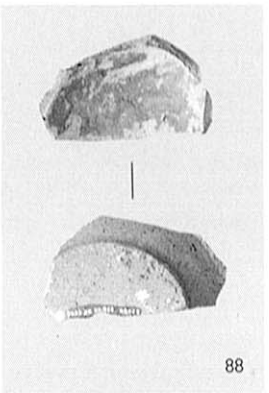

72

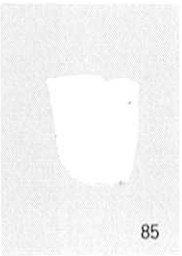

77

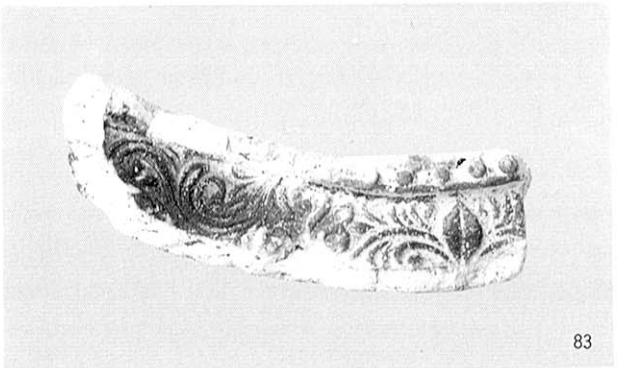

76

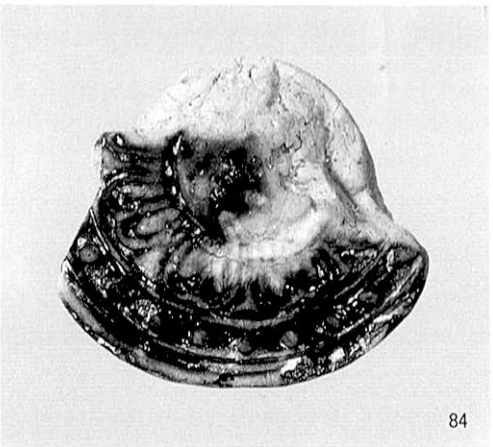

78

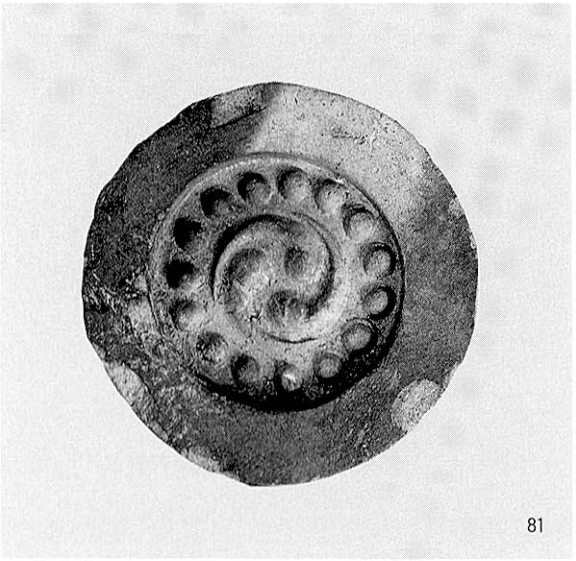

87
86
89


88

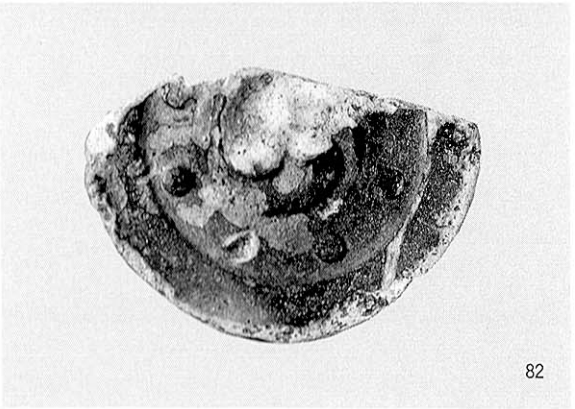

85

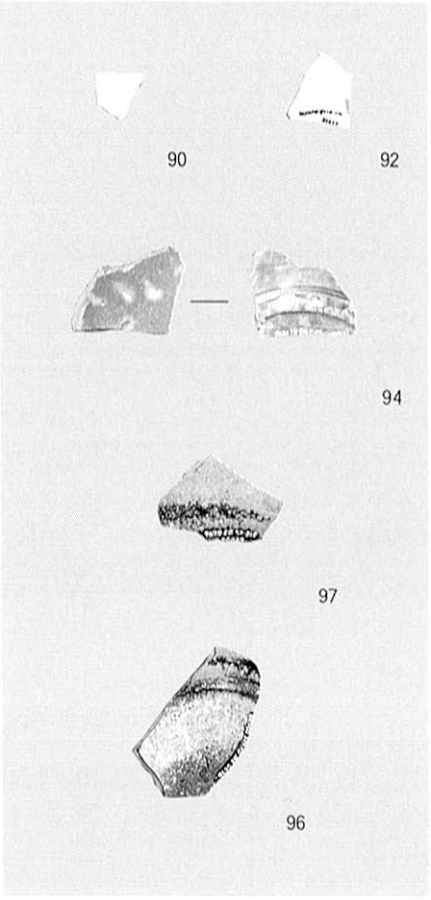

83

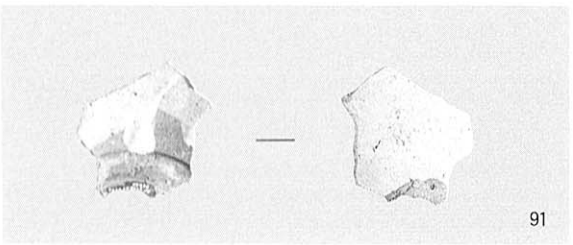

84

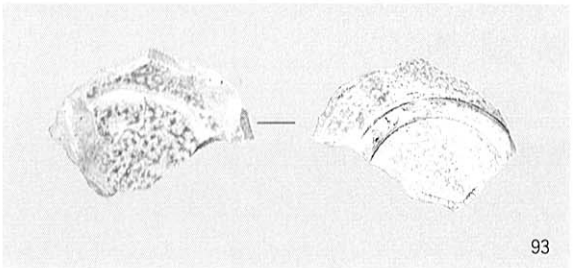

81


95


82


90 92 94 97 96


91


93

鴻臚館跡 8

— 平成7・8年度発掘調査概要報告 —

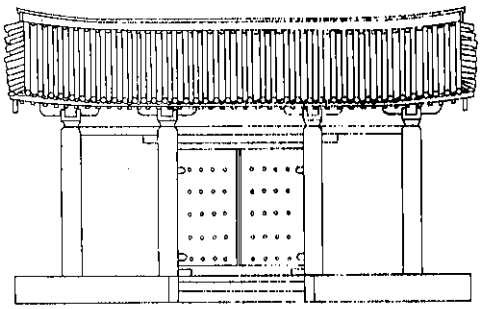
福岡市埋蔵文化財調査報告書第545集

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
平成9年3月15日

印　刷　慶和印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目15-1

KŌROKAN
8

Excavation and Studies of
Kōrokan Ruins
in Fukuoka



March 1997
THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN